

## 第5章 熟議への意識と地域への認識の変化

### 1. 「熟議」アンケートの概要

「熟議 2013 in 兵庫大学」では、参加者に対して、熟議の前後で参加者の意見（世論）がどのように変化をするのかを計測すること、また、「熟議」そのものへの評価を測ることを目的として、議論の前に熟慮の段階としての「事前アンケート」と、議論の直後に「事後アンケート」を実施した。2つのアンケートは記名式であり、個別にマージし、回答者個人についても意見の変化を追跡可能にしている点が特徴である。

アンケートの内容については、「事前アンケート」も「事後アンケート」もともに、熟議という市民が互いの立場を尊重しながら議論することへの評価と意見と、その議題として地域に関する設問で構成されている。後者の設定は、討議型世論調査の手法を応用したもので、地域に対する見識やそれに関わる政策についての意見の「熟議」前後での変化を計測するために必要と考えてのものである。

「事前アンケート」の回答回収数は83件であり、「事後アンケート」の回答回収数は78件であった。当日での議論の参加者は80名であり、「事前アンケート」の段階で回答しながらも、議論には参加することがなかった3名、また、議論に参加しながらも「事後アンケート」に回答しなかった2名がある。両方で共通する回答者は78名であり、前後の比較の際はこの78名を対象とする。

なお、属性は参加者の申告した性別、所属先、年齢階級をベースとした。アンケート調査票にフェイスシートに関する項目を含めていないため、回答者の属性はこれに準じるものとする。参加者の性別は「男性」=46名、「女性」=34名、年代別では、「20歳未満」=32名、「20歳以上40歳未満」=21名、「40歳以上60歳未満」=11名、「60歳以上」=16名である。所属別では、それぞれの所属先の名称より、自治体関係者など「行政関係」=13名、民間企業や自営業者など多くが公募により参加した「民間・市民活動」=15名、本学の連携先であり、世代間での議論を重視する観点から声掛けを行ったいなみ野学園などの「高齢者大学」=8名、いずれも学校など組織を通し依頼を行い集まった「高校生」=28名、そして本学の学生である「大学生」=16名である【表5-1-1】。

参加者属性

項目	参加者数	比率
男性	46	57.5
女性	34	42.5
20歳未満	32	40.0
20歳以上 40歳未満	21	26.3
40歳以上 60歳未満	11	13.8
60歳以上	16	20.0
合計	80	100.0

項目	参加者数	比率
行政関係	13	16.3
民間・市民活動	15	18.8
高齢者大学	8	10.0
高校生	28	35.0
大学生	16	20.0
合計	80	100.0

表 5-1-1 参加者属性

## 2. 議論に臨む考え方と評価

### (1) 議論することへの評価

これまでの議論への経験について、事前アンケート（N=83）の結果から分析する。

昨年の「熟議 2012 in 兵庫大学」に関する「事前アンケート調査」の結果を振り返ると、全体の3分の2に近い参加者が、ワークショップなどを経験しており、これは比較的高い数値と考えられる。しかし、「熟議 2013 in 兵庫大学」では、「これまでほとんど経験したことがない」が56.3%と過半数を占めており、昨年度とは傾向が異なる。この理由として、昨年度は高校生の回答が11%と少なかったが、本年度は高校生、大学生の回答が44件（53.0%）であることが影響していると考えられる。実際に、高校生の64.3%、大学生の68.8%が、ワークショップなどに対して、「これまでほとんど経験をしたことがない」と回答をしている。若年者に関しては、教育や生活の場面において、議論を通して物事を決定するという経験をあまりして来ていないことがわかる【図 5-2-1】。

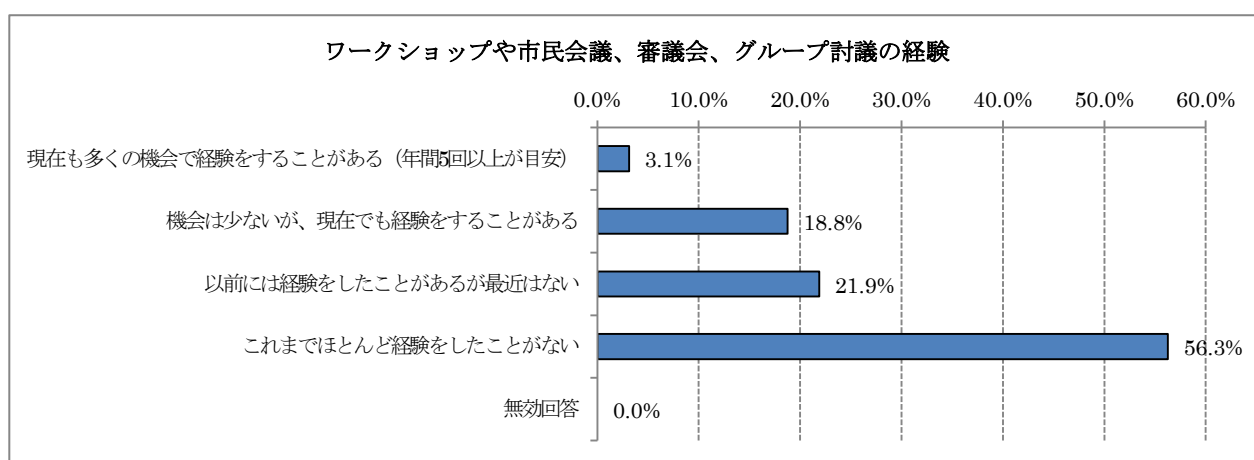


図 5-2-1 ワークショップや市民会議、審議会、グループ討議の経験

次に、「参加者が議論し、対策や方針を作成する」ことに対し、良い点と悪い点をそれぞれ求めた。

良い点として最も多い回答は、「多様な考えを知る機会がある」であり、79.5%を占めている【図 5-2-2】。多様な人材が集い議論を重ねる熟議の場では、自分以外の考えを知ることへの期待が大きい。それ以外の選択肢への回答は少ない。この傾向は、昨年度とも同様であるが、参加者全般にこれまでの経験では、議論についてのルールが不明確であり、教育や職場においても考える機会が少なかったことにあるのではないかと。

悪い点として挙げた最も多い回答は、「議論だけではまとまらず決められない」で 38.6%を占めている【図 5-2-3】。所属別にみると、行政関係者（N=13）で 69.2%、民間・市民活動（N=17）で 64.7%の参加者がそうした回答を行っており、比率的にも高い。行政でも民間であっても、結論を出し実行をするという過程が重要であり、議論のみでは不十分と感じている可能性がある。次いで、「立場が上の人の意見に影響されやすい」で 22.9%である。この回答は、所属別では、大学生（N=16）が 31.3%、高齢者大学（N=9）が 66.7%と高い。学習の場にある回答者に、年齢を問わずこの割合が高いことは興味深い。今後、教育の場での議論は、開かれた、あるいは平等の立場での参加を前提としていなければならないだろう。

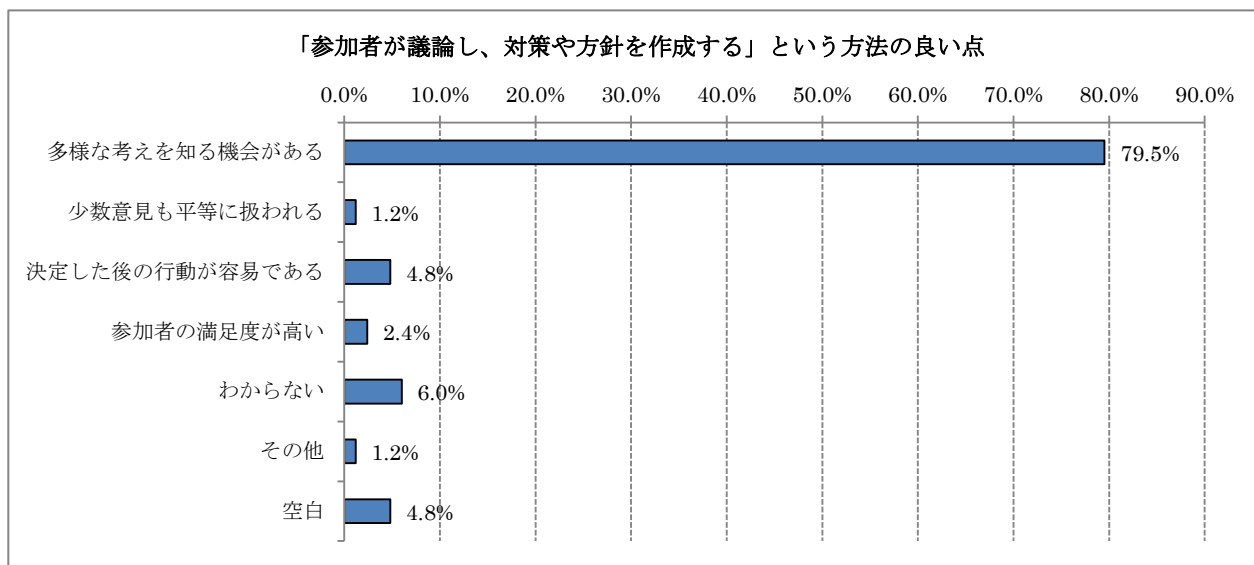


図 5-2-2 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点

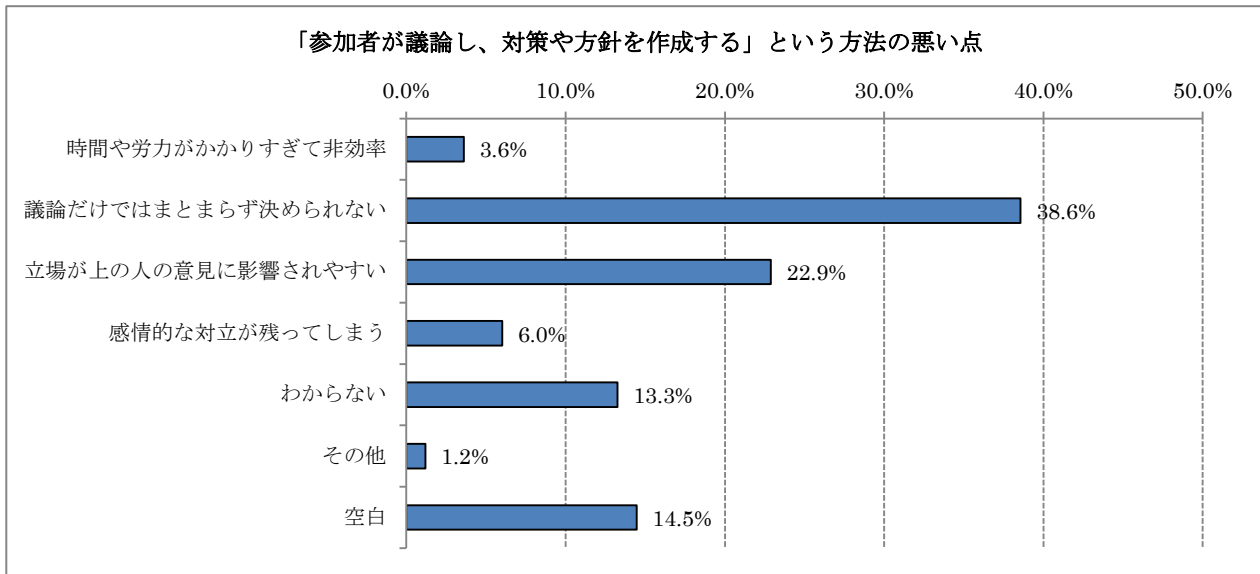


図 5-2-3 「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点

## (2) 議論に対する期待と得られた成果

熟議の議論がどのような役割を果たすのかを考えるために、議論の段階における期待と、議論の後に実際に得られた成果について、「事前アンケート」における結果、「事後アンケート」における成果を比較する (N=78)。

「事前アンケート」で質問した、議論の段階における期待に挙げた回答の多かった項目は、「他の人の意見を聞く」が 44.9%と最も多く、「どのように進むのか、進め方を知る」が 23.1%、「結論や提案がどのようなものになるのかを知る」が 15.4%である。これらから、熟議に関する参加者の期待として、知ることや話を聞くことなど受け身の姿勢があったことが確認できる。

一方で、「事後アンケート」における成果を見てみると、「他の人の意見を聞く」が 39.7%と期待の段階 (44.9%) よりも低くなっている。逆に、「自分の意見を述べる」は、期待が 1.3%であったのに対し成果は 17.9%、「多くの人と交流したり話をする」は期待が 15.4%から、成果が 29.5%に増大している。また、知ることについては「どのように進むのか、進め方を知る」が 9.0%、「結論や提案がどのようなものになるのかを知る」が 3.8%と大きく低下している。

こうした変化は、結論を得ることが十分にできなかったという否定的な意見がある一方で、参加者にとって議論の段階の重要性が、受け身ではなく積極的な情報発信であり、また交流であることの理解の促進につながったとも考えられる【図 5-2-4】。

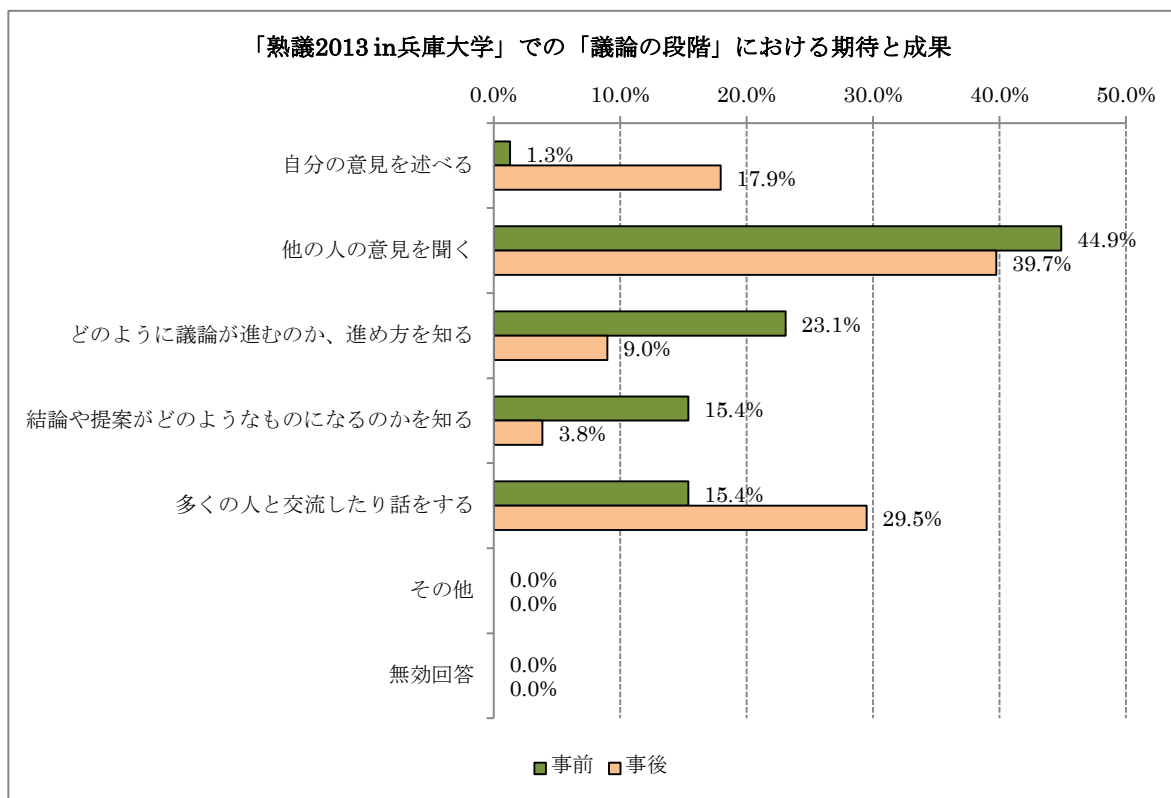


図 5-2-4 「熟議 2013 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果

### (3) 議論に臨む重要な資質とは

「熟議 2012 in 兵庫大学」において、学生がグループのファシリテーターを務めるという機会に際し、熟議に参加する学生に対して、10 の能力についての自信を熟議の前後で自己評価する方法で成長を計測した。その能力とは、①自主性、②思考力、③実行力、④対応力、⑤交渉力、⑥コミュニケーション力、⑦計画性、⑧規律性、⑨運営力、⑩貢献性、である。この能力の向上に関する項目を活かし、一方で学生と違い成長の計測が難しい高齢者や既に社会人として働く一般の参加者の場合にも適用するために、高校生や大学生の参加者には、成長についての自己評価を行う一方で（この分析については、第 6 章を参照のこと）、高齢者大学の在学者、行政関係者、民間など一般の参加者を対象に、10 の能力について、アンケートで下記の要素に関する重要度を 5 段階で評価してもらった。5 段階評価では、5 が非常に重要、1 が全く重要ではないという評価であり、その平均値を、「事前アンケート」と「事後アンケート」の共通の回答者（N=35）を対象に比較する【図 5-2-5】。

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| ①物事に進んで取り組む自主性    | ②要点を把握し論理的に考える思考力   |
| ③目標に向かって行動する実行力   | ④状況に合わせて適切に対応する能力   |
| ⑤人に働きかけ行動を促す交渉能力  | ⑥相互理解のためのコミュニケーション力 |
| ⑦課題解決をはかるための計画性   | ⑧規律を守ること            |
| ⑨チームをまとめ適切に運営する能力 | ⑩チームに参画する貢献性        |

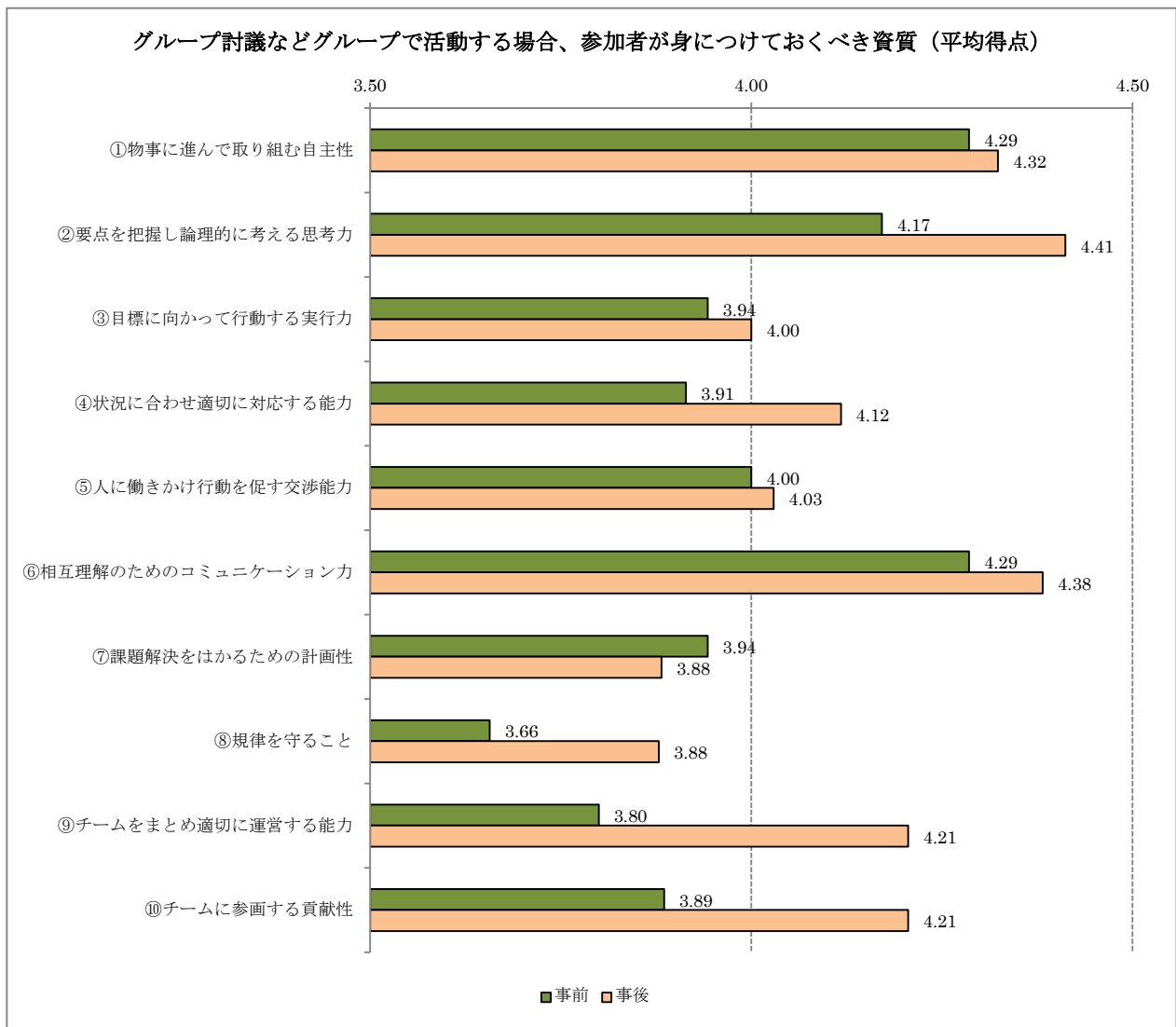


図 5-2-5 グループ討議などグループで活動する場合、参加者が身につけておくべき資質（平均得点）

「事前アンケート」で平均値が高く、必要とされる能力としては、「①物事に進んで取り組む自主性」、「⑥相互理解のためのコミュニケーション力」が 4.29 ポイントであり、「②要点を把握し論理的に考える思考力」が 4.17 となっている。逆に、評価が低いのは、「⑧規律を守ること」(3.66)、「⑨チームをまとめ適切に運営する能力」(3.80) であり、チームとして関わろうとすることについては、事前の段階では必要とは考えられていなかった。

事前と事後を比較すると、「⑦課題解決をはかるための計画性」を除き、いずれも事後の方でポイントが上昇している。議論の後、「分別ある大人」たちは上述の要素の多くを重要と判断したのである。この点から、社会的に成長段階にある学生の成長を計測するための能力の要素として 10 の能力は妥当なものであったといえるのではないかな。

変化の詳細であるが、事前でも評価が高かった、「②要点を把握し論理的に考える思考力」は、事後でも 4.41 と最も高く、次いで「⑥相互理解のためのコミュニケーション力」が 4.38 となっている。次に、

ポイントの上昇幅が大きいのは、「⑨チームをまとめ適切に運営する能力」で、事前で 3.80、事後では 4.21 となっている。事前では、非常に重要とした回答が 17.1%を占めるだけであったが、事後では 31.4%となっている。同じく、「⑩チームに参画する貢献性」も 3.89 から 4.21 に増加し、その内容を見ると、非常に重要が 17.1%から 28.6%になっている。いずれもチームで議論の結果を出すという観点の重要度が高くなっている。

### 3. 「熟議 2013 in 兵庫大学」と熟議民主主義

#### (1) 認知度と参加

「熟議 2013 in 兵庫大学」は、議論の機会だけではなく、事前の熟慮やその後の交流なども含む一連の手法である。具体的な手法は本学で開発をしたものであるが、「熟議」については文部科学省などが推進したことや「熟議の国会」など言葉としても使われ、より深い議論の機会としても知られるようになってきている。この点について出席者の期待や理解について問う。

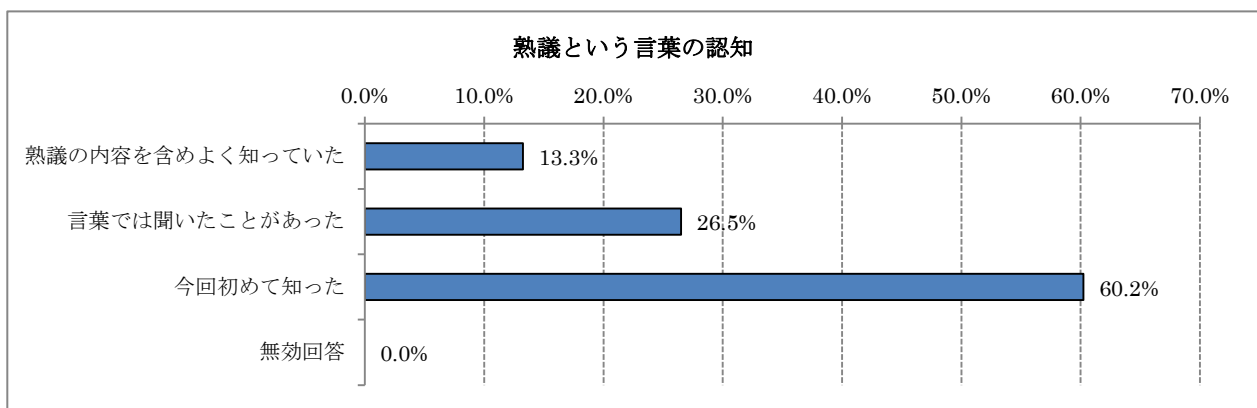


図 5-3-1 熟議という言葉の認知

「事前アンケート」(N=83) では「熟議」という言葉の理解に対する質問を行った。「熟議の内容を含めよく知っていた」は 13.3%であり、「言葉では聞いたことがあった」は 26.5%、そして、「今回初めて知った」は 60.2%である。社会背景から考えると、「熟議」という言葉の知名度は決して高くはない。それでも、昨年度の「熟議 2012 in 兵庫大学」で同じ質問をした結果では、それぞれの数字が 3.1%、26.8%、70.1%であったことを踏まえれば、昨年度と比較すると知名度は上昇していると言える【図 5-3-1】。

年齢別で「熟議」の知名度を見てみると、「20 歳未満」では「熟議の内容を含めよく知っていた」(N=32) が 3.1%、「20 歳以上、40 歳未満」(N=21) が 14.3%、「40 歳以上、60 歳未満」(N=11) で 9.1%、そして「60 歳以上」(N=19) は 31.6%と、年齢が高いほど知名度が上がっている事情が読み取れる【表

5-3-1】。「20 歳未満」というのは高校生、または大学生であり、その知名度は必ずしも高くはない。文部科学省は、大学生や高校生に「熟議」の機会を提供し定着させようと推し進めていたが、さらに「熟議」と民主主義の関連性を学生に主体的に考えさせるなど、教育的意義を明確にするとともに、議論形式の教育実践を市民性の形成を促すシティズンシップ教育の一環に位置づけることも必要であると思われる。

年齢階級別・熟議という言葉の認知

	20 歳未満	20 歳以上 40 歳未満	40 歳以上 60 歳未満	60 歳以上
熟議の内容を含めよく知っていた	3.1%	14.3%	9.1%	31.6%
言葉では聞いたことがあった	25.0%	23.8%	45.5%	21.1%
今回初めて知った	71.9%	61.9%	45.5%	47.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表 5-3-1 年齢階級別・熟議という言葉の認知

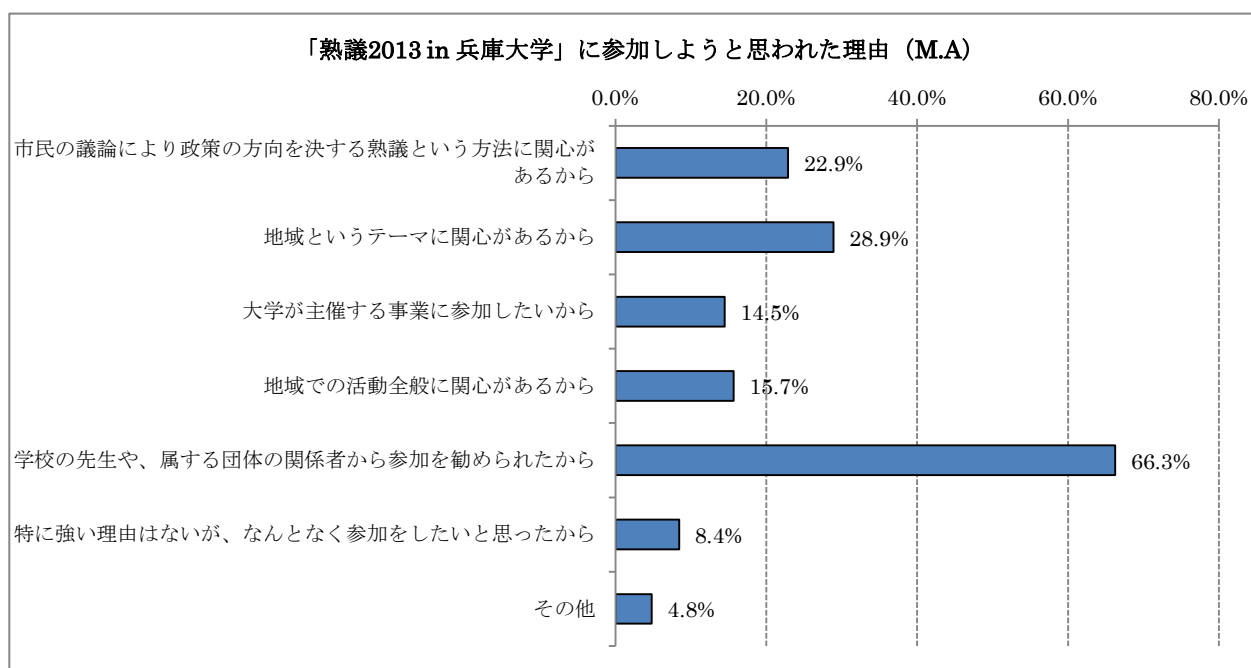


図 5-3-2 「熟議 2013 in 兵庫大学」に参加しようと思われた理由

次に、「熟議 2013 in 兵庫大学」に参加しようと思った理由であるが、3 分の 2 を「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」が占めている【図 5-3-2】。複数回答であるため、合計は 100%にならないが、多くの方が「勧め」があつて参加したことがわかる。次いで「地域というテーマに関心があるから」が 28.9%、「市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから」が 22.9%となっている。直接には、地域、そして熟議の方法と、対象（テーマ）と手法に関心があつて参加されたと思われる。



大きい。以下、所属別の参加理由を示す【表 5-3-2】。

まず公募により応じられた方の多い、「民間・市民活動」に所属する回答者の場合、「市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから」が 64.7%、また、「地域というテーマに関心があるから」が同じく 64.7%であり、テーマと手法に強い関心があり、参加したことがわかる。「行政関係」者では、「地域というテーマに関心があるから」が 53.8%を占めている。地方公務員が多く、地元への関心があつての参加であると思われる。「高齢者大学」の学生の回答者も「地域というテーマに関心があるから」が 44.4%を占めており、生涯学習の一環として地域での活動に関心があるからであると思われる。「高校生」の場合は 96.4%とほぼ全員が「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」を挙げている。「大学生」は 31.3%が「大学が主催する事業に参加したいから」を挙げており、この数字には学生の大学に対しての新しい期待が伺える。

所属別・「熟議 2013 in 兵庫大学」に参加しようと思われた理由 (M.A)

	行政関係	民間・市民活動	高齢者大学	高校生	大学生
市民の議論により政策の方向を決する熟議という方法に関心があるから	23.1%	64.7%	11.1%	7.1%	12.5%
地域というテーマに関心があるから	53.8%	64.7%	44.4%	7.1%	0.0%
大学が主催する事業に参加したいから	15.4%	17.6%	11.1%	3.6%	31.3%
地域での活動全般に関心があるから	30.8%	17.6%	22.2%	10.7%	6.3%
学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから	46.2%	23.5%	66.7%	96.4%	75.0%
特に強い理由はないが、なんとなく参加をしようと思ったから	7.7%	0.0%	11.1%	7.1%	18.8%
その他	0.0%	5.9%	11.1%	3.6%	6.3%
回答件数	23	33	16	38	24

表 5-3-2 所属別・「熟議 2013 in 兵庫大学」に参加しようと思われた理由

先述したように、「熟議 2013 in 兵庫大学」は兵庫大学の開発した、熟慮の段階から議論へという発展段階により構成される熟議の手法であるが、参加者に対してこの手法についての理解度も問うている【図 5-3-3】。

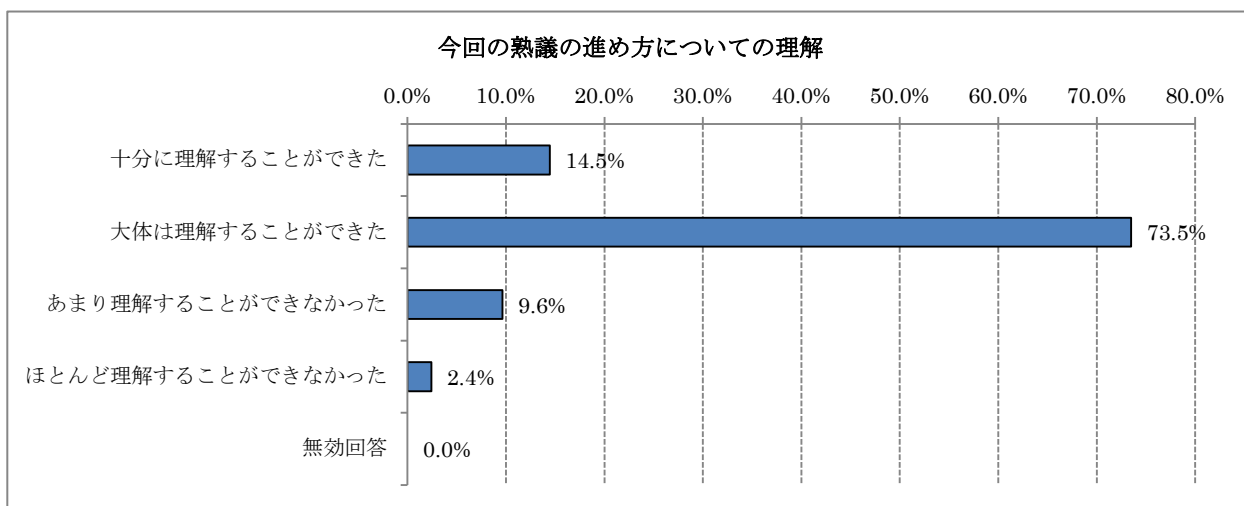


図 5-3-3 今回の熟議の進め方についての理解

「十分に理解することができた」は14.5%、「大体は理解することができた」は73.5%であり、88.0%が手法を理解していたことになる。「熟議」という言葉の認知度に比べ理解度は高い。また昨年度の「熟議 2012 in 兵庫大学」では、理解することができたとする回答が82.5%であり、昨年度と比しても、やや理解度が高くなっている。

## (2) 評価と比較

「事後アンケート」(N=78)において「熟議 2013 in 兵庫大学」に参加したことに関する評価についても分析を行う。

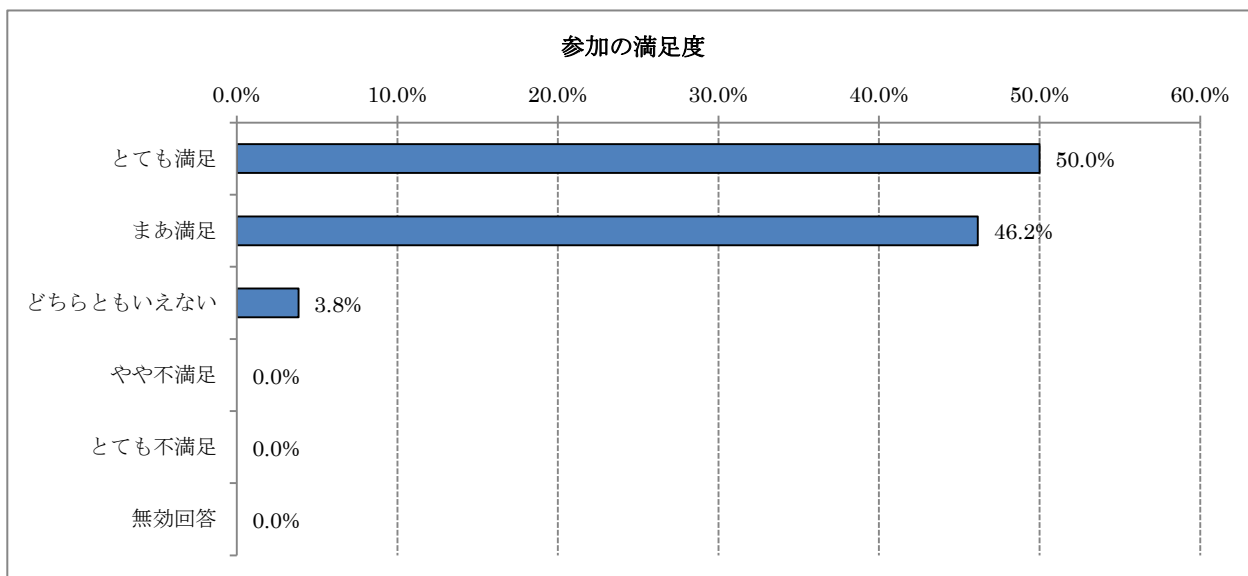


図 5-3-4 参加の満足度

参加しての満足度は、「とても満足」が50.0%、「まあ満足」46.2%と、ほとんどが満足したと回答をしている。昨年度の「熟議2012 in 兵庫大学」でも、「とても満足」が54.6%、「まあ満足」が37.1%で、9割が満足としており、「熟議」については参加に大きな意義があることがわかる【図5-3-4】。

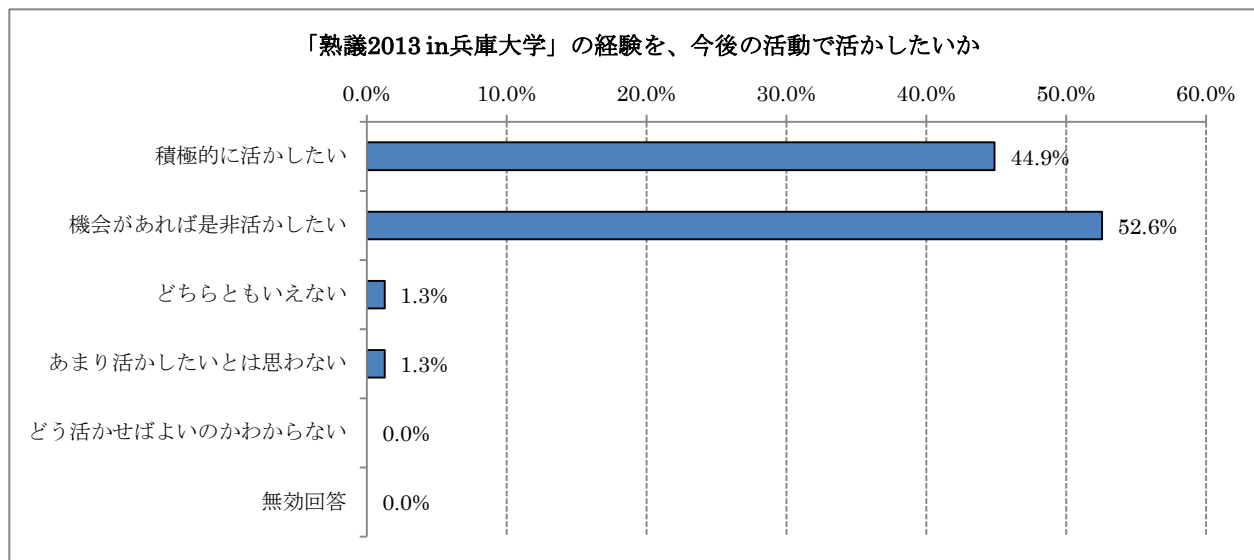


図5-3-5 「熟議2013 in兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいか

「熟議2013 in 兵庫大学」の経験を今後の活動で活かしたいか、については44.9%が「積極的に活かしたい」、52.6%が「機会があれば是非活かしたい」と回答をしており、ほとんどの人が、活かすことに賛成である【図5-3-5】。「積極的に活かしたい」、との回答は、「民間・市民活動」(N=14)では57.1%が、また「行政関係」(N=13)では53.8%を占めており比較的高く、逆に「高齢者大学」(N=8)では25.0%、「高校生」(N=28)では39.3%と低くなっている。その活動に使用できるツールとして認識しての回答があったものと思われる。

では、どの点を有益と感じたのかに関して、「熟議2013 in 兵庫大学」と過去に経験のある話し合いやワークショップとの比較の問いを設けた【図5-3-6】。

兵庫大学の熟議手法の柱である熟慮の段階を設けることについてみると、まず「熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ、発言しやすかった」は、「非常に思う」が28.2%、「思う」が62.8%を占める。一方で、「熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」は、それぞれ34.6%、53.8%である。この数字から熟慮の段階を自分の意見を出すためではなく、意見を聞くためと考えていることが伺える。この点は、熟議への期待として、「他の人の意見を聞くことへの期待が大きい」との回答者の割合が高いことと共通する。ただ、「これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた」については、「非常に思う」が23.1%と低く表れており、熟慮の段階を設けることの理解をさらに進める必要があると思われる。

次に、テーマとの関係についてであるが、「熟議を通して、テーマ(加古川地域)について、興味や関

心がより高まった」では、「非常に思う」が 39.7%と最も高くなっている。また、「議論の内容が充実し、テーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった」は、「非常に思う」が 35.9%、「思う」が 52.6%と合計で 88.5%となり、賛同の多い項目となった。熟慮の段階では、過程を踏んで加古川地域に関する考えを、「強み」、「弱み」にまとめるようにしていたが、関心を持つことにも、自ら調べ知識を深めることにも成果を挙げた。

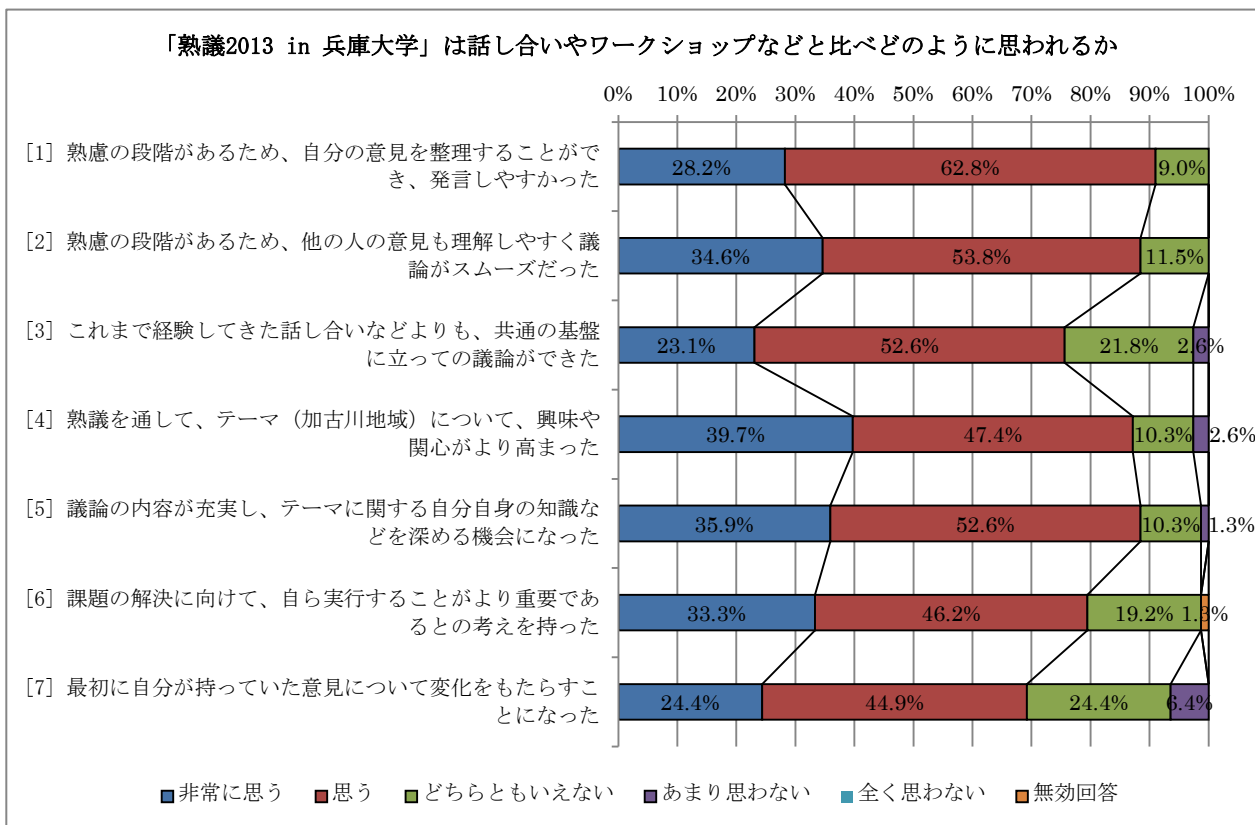


図 5-3-6 「熟議 2013 in 兵庫大学」は話し合いやワークショップなど比べどのように思われるか

議論に終わらぬ熟慮の成果をどのように捉えるかであるが、「課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った」は、「非常に思う」が 33.3%と比較的高く、議論の中で解決策と参加者の役割を考える場面を設けたこと、さらに熟慮には行動の段階を上げていることへの理解があったと思われる。「最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった」については、「非常に思う」「思う」が合わせて 69.3%であり、他の項目よりも低い。ただし、昨年度の「熟議 2012 in 兵庫大学」でのこの項目への肯定は、39.2%と低かった。また 2012 年度と 2013 年度を比較し肯定の比率に大きな差のある項目は、「…意見について変化をもたらすことになった」のみである。2012 年度との差の要因は、テーマの違いと思われる。2012 年度は生涯学習を、2013 年度は地域をテーマとしたが、地域は参加者にとって身近で共通の要素も多く、他の意見にも理解を示しやすい。このことが、自分としては自分の意見が変化をしたと感じるのである。

### (3) 熟議民主主義の可能性

今後に熟議手法を普及させることができるのかを考えるために、「熟議 2013 in 兵庫大学」における市民による熟議は、現在の行政でどのように役立つかについて、議論を終えてから、「事後アンケート」で回答を得た【図 5-3-7】。この内容は、熟議民主主義<sup>2</sup>を進める是非を考える上で役立つ議論でもある。

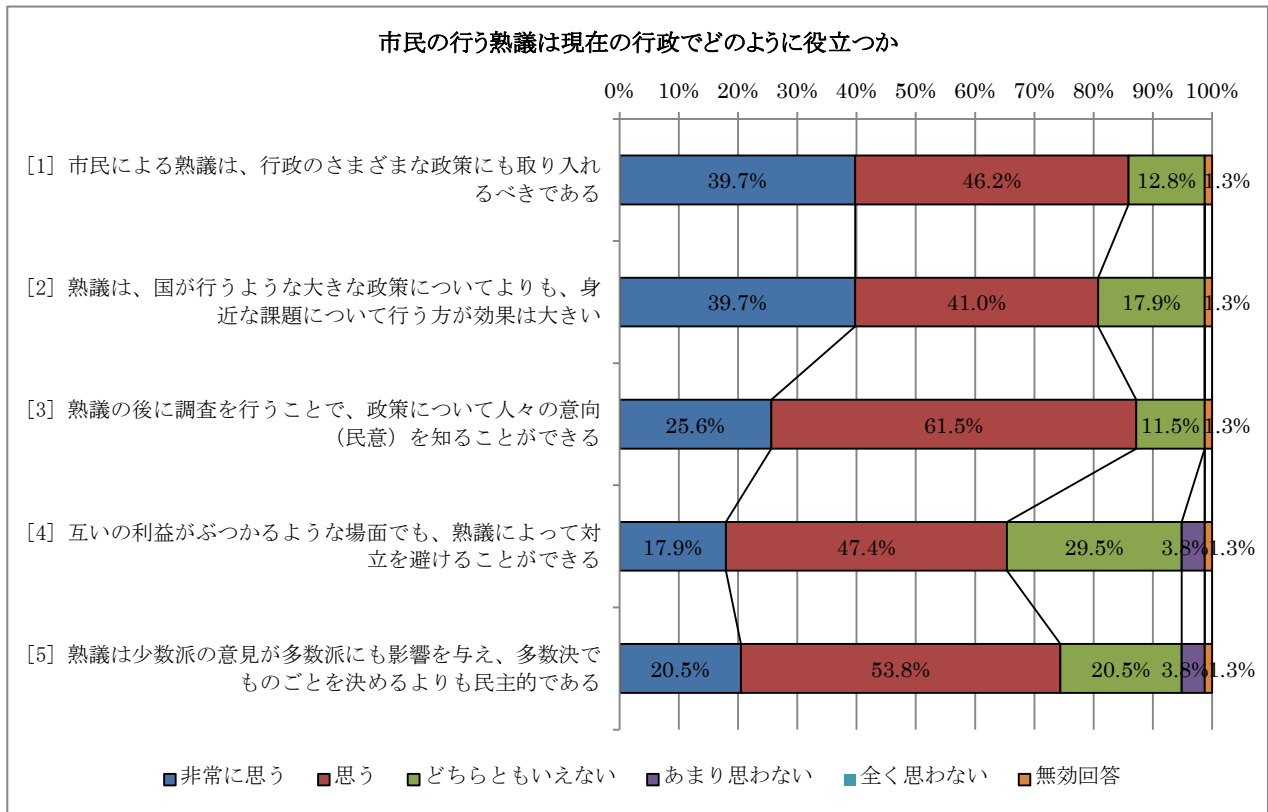


図 5-3-7 市民の行う熟議は現在の行政でどのように役立つか

「市民による熟議は、行政のさまざまな政策にも取り入れるべきである」については、「非常に思う」が 39.7%、「思う」が 46.2%であり、熟議の手法が現実の政策決定に活かせる可能性を示している。この中で、回答した参加者を所属別にみると、「行政関係」（N=13）では「非常に思う」が 7.7%、「思う」が 46.2%、「どちらともいえない」が 38.5%と、熟議手法の政策決定への取り入れには慎重である。これに対し、「民間・市民活動」（N=14）では「非常に思う」が 57.1%、「思う」が 35.7%を占めており「非常に思う」の割合が高い。政策を実施する行政関係者の場合、手続きの煩雑さから導入は難しいと考えているのに対し、議論の場を必要とする市民は、熟議民主主義に可能性を感じていると思われる。また、

<sup>2</sup> 熟議民主主義は、代議制民主主義を補完するもので、政策の決定過程において、平等な参加者による熟慮と議論を重視する。参加者は議論を通して合意を形成する。主として先進国において、1980年代以降、住民参加の拡大と政府部門の民営化の流れの中で登場した考え方である。

年齢階級では、「20歳未満」(N=32)では「非常に思う」が46.9%、「思う」が同じく46.9%を占めており、若い世代では取り入れることに積極的である。

地方と国との違いで、「熟議は、国が行うような大きな政策についてよりも、身近な課題について行う方が効果は大きい」との項目に対し、「非常に思う」が39.7%、「思う」が41.0%と地方政策での活用への意向は強い。導入には慎重と思われる「行政関係者」(N=13)では、「非常に思う」が38.5%、「思う」が30.8%と、地方自治での導入に可能性を感じていることが伺われる。

ところで熟議については、原発の存続を巡って討議型世論調査が実施された過去がある。課題に関する情報を持った人同士で議論を行い、その結果として意向を明らかにすることで、世論調査よりもより正確に民意を把握することができるという期待がある。これを踏まえ、熟議の後に調査を行うことで、政策について人々の意向(民意)を知ることができるか、という質問を行い、全体では「非常に思う」が25.6%、「思う」が61.5%で、合計は87.1%を占める。特に「民間・市民活動」(N=14)では「非常に思う」42.9%、「思う」57.1%と100%の賛意である。熟議の結果を民意として政策に反映させるべきとの考えである。

次に、熟議の持つ利点としての合意形成の過程に注目する。合意形成を重視する立場か否か、「互いの利益がぶつかるような場面でも、熟議によって対立を避けることができる」との問いについては、「非常に思う」が17.9%、「思う」が47.4%と全体的には賛同が過半数を占めるが、一方で「どちらともいえない」が29.5%を占め、疑問を持つ回答者も多い。例えば、「大学生」(N=15)では、「非常に思う」とした回答は0で、「どちらともいえない」が40.0%である。大学生は参加者としても、ファシリテーターとしても参加しており、合意形成の難しさを知っているといえる。

さらに、熟議による合意形成の利点として指摘される、「少数派の意見が多数派にも影響を与え、多数決でものごとを決めるよりも民主的である」との問いには、「非常に思う」が20.5%、「思う」が53.8%を占め、全体的に「熟議」が民主主義の促進を果たすという回答傾向があった。

## 4. 地域に対する考え方の変化

### (1) 地域活動の機会

「熟議 2013 in 兵庫大学」のテーマは「加古川地域の未来について話をしよう!」であり、多様な立場、多世代で地域を考える機会となったと思われる。本章ではテーマについての参加者の意識を検討する。

まず「事前アンケート」の結果(N=83)から参加者の事前の地域活動経験の有無を示す。過去1年間の地域活動の機会であるが、59.0%が「機会があった」と回答しており、地域活動に参加した経験のある回答者が多いことがわかる【図 5-4-1】。

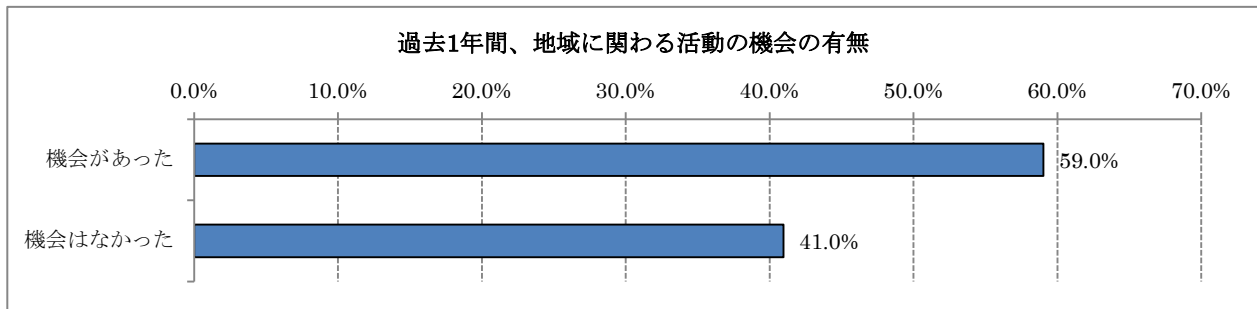


図 5-4-1 過去1年間、地域に関わる活動の機会の有無

これを年齢階級別に示すと、次の通りである。年齢が高くなるほど「機会があった」とする比率が高まっていることがわかる。特に60歳以上では94.7%とほとんどの方が「経験があった」と回答をしている。一方で、20歳未満も4割以上が地域活動の「機会があった」とすることも注目すべきである【図5-4-2】。

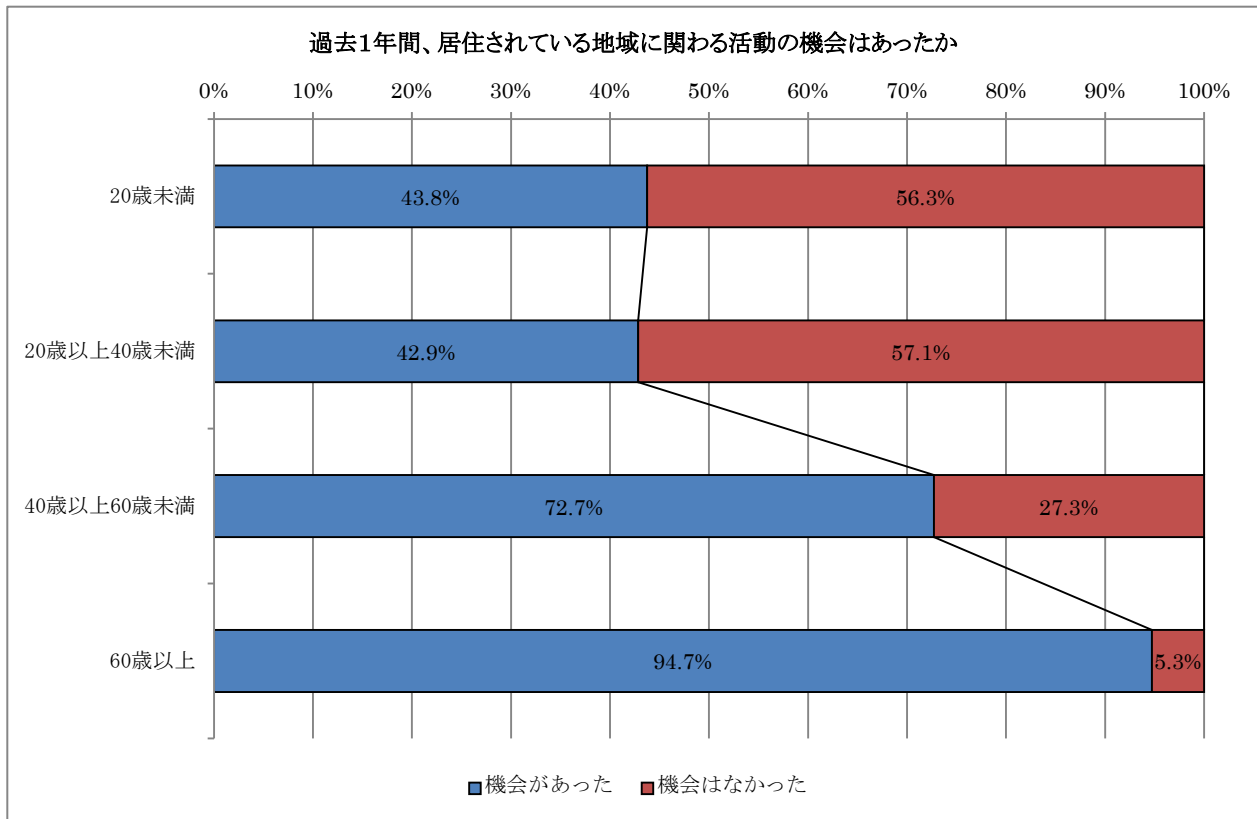


図 5-4-2 過去1年間、居住されている地域に関わる活動の機会があったか

次に、活動の機会があったとする回答者（N=49）を対象にその活動内容を示す。複数回答であり、合計は100%にならない。回答数が100件であったため、49人の回答者数で除すと、回答者1人につき平均で約2件の活動をしていたことになる。

最も多い回答は、「地域に関わるボランティアやNPOでの地域活動」で53.1%を占め、回答者の過半数が経験をしていたことになる。次いで、「自治会、老人会、婦人会、PTA等での地域活動」と「学校や職場の行事や事業としてある地域活動」がいずれも46.9%となっている。テーマ型の活動と自治会など地縁に基づく活動の双方の割合が高いことがわかる。さらに、「趣味や特技に関わる地域活動」が26.5%、「寺や神社等の行う地域活動」が16.3%となっている【図5-4-3】。

この中で「趣味や特技に関わる地域活動」では、60歳以上の回答者で55.6%を占めており、高齢者の生きがいが同時に地域活動にも寄与することを示している。生きがいつくりの新たな背景としても注目される。

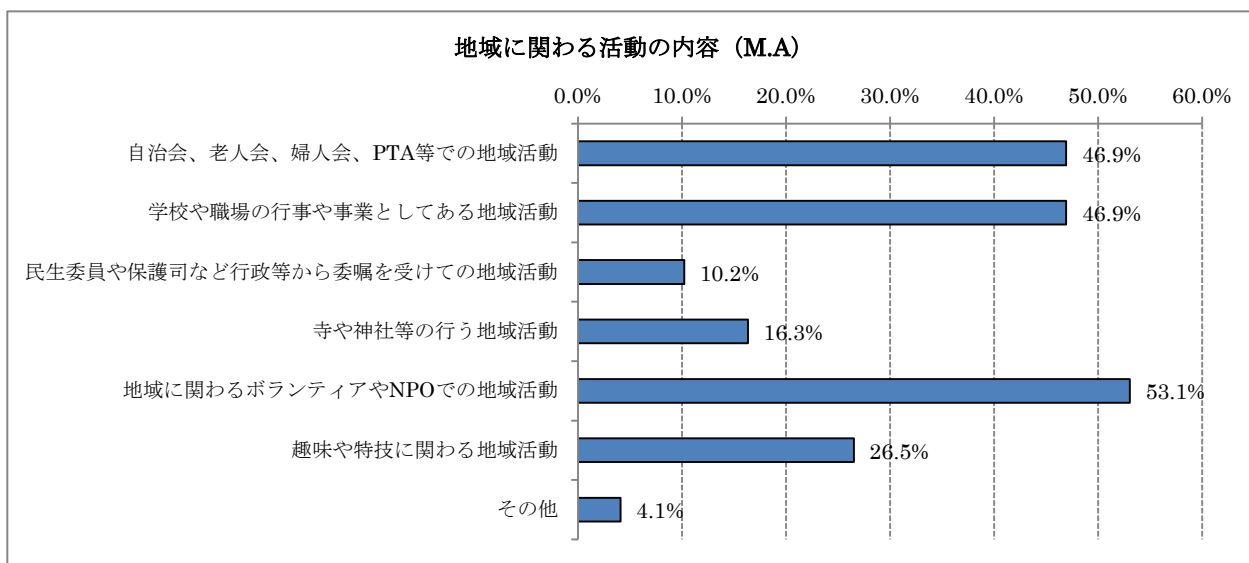


図5-4-3 地域に関わる活動の内容

所属別・地域に関わる活動の内容 (M.A)

	行政関係	民間・市民活動	高齢者大学	高校生	大学生
自治会、老人会、婦人会、PTA等での地域活動	75.0%	53.3%	100.0%	8.3%	0.0%
学校や職場の行事や事業としてある地域活動	37.5%	26.7%	50.0%	66.7%	66.7%
民生委員や保護司など行政等から委嘱を受けての地域活動	0.0%	26.7%	12.5%	0.0%	0.0%
寺や神社等の行う地域活動	25.0%	20.0%	25.0%	0.0%	16.7%
地域に関わるボランティアやNPOでの地域活動	25.0%	80.0%	37.5%	50.0%	50.0%
趣味や特技に関わる地域活動	12.5%	53.3%	25.0%	16.7%	0.0%
その他	0.0%	13.3%	0.0%	0.0%	0.0%
回答件数	14	41	20	17	8
回答者数	8	15	8	12	6

表5-4-1 所属別・地域に関わる活動の内容



所属別に活動状況を示す【表 5-4-1】。まず、回答件数と回答者数に注目する。「民間・市民活動」では、15 人の回答者により、41 件の回答数であるため、平均で 2.73 件の活動をしたことになり、最も多い。他方で、「高校生」で 1.41 件、「大学生」で 1.33 件と平均よりも低くなっている。

活動の内容であるが「行政関係」では、「自治会、老人会、婦人会、PTA 等での地域活動」が 75.0% となっており、居住をしているコミュニティでの地縁活動が中心である。「民間・市民活動」に属する回答者の 80%は「地域に関わるボランティアや NPO での地域活動」をしたと回答しており、テーマ型の活動に多く関わっている。「自治会、老人会、婦人会、PTA 等での地域活動」、「趣味や特技に関わる地域活動」にも過半数の 53.3%が従事したと回答しており、地域との関わりは多様である。「高齢者大学」では「自治会、老人会、婦人会、PTA 等での地域活動」の回答が 100%と、全員がかかわった経験があるとしており、また「学校や職場の行事や事業としてある地域活動」が 50%を占め、定期的な活動へ関わることが多いと思われる。「高校生」や「大学生」は回答の傾向が類似しており、3 分の 2 が「学校や職場の行事や事業としてある地域活動」を、半数が「地域に関わるボランティアや NPO での地域活動」を行ったと回答している。こうした数字を見ると学校側の働きかけも重要であると思われる。

## (2) 地域に対する考え方

「事前アンケート」と「事後アンケート」において、地域に対する 10 の項目についての、賛否の度合いを問うことで、地域への考え方を明らかにするとともに、議論の前後でそれがどのように変化したかについても確認をする。この手法は「熟議 2012 in 兵庫大学」で用いたものであり、討議の前後での世論の比較を重視する討議型世論調査の手法の参考にした。対象は、「事前アンケート」と「事後アンケート」の双方に回答のあった 78 件である。

比較を容易にするために、得点化を行う。「大いに賛成」には 2 を、「やや賛成」には 1 を、「普通」には 0、「やや反対」には -1、「大いに反対」には -2、としてその平均値を求めている。0 が中立ということになる【図 5-4-4】。

項目については、大きくは 2 つの内容に分かれる。

第一の内容としては、地域における基盤となるものである。次の設問項目がある。

- [1] 自分の住む地域に対し、誇りを持つことは素晴らしいことである。
- [2] 地域間で、その豊かさや経済に格差のあることは仕方のないことである。
- [3] 住民同士のつながりや、しっかりとした信頼関係がある地域ほど、良好な地域である。
- [9] 古くからの習慣が根づいている地域での生活は、人間関係が濃密で住みやすい。

まず「[1] 自分の住む地域に対し、誇りを持つことは素晴らしいことである」については、「事前アンケート」で 1.64、「事後アンケート」で 1.76 となっており事前、事後ともに得点が高い。実際の回答の比率を見ると、「事前アンケート」で「大いに賛成」は 71.8%、「やや賛成」は 20.5%と 9 割以上が賛意を示している。地域への誇りは地域活動や地域を考える上での基本となっている。

「[3] 住民同士のつながりや、しっかりとした信頼関係がある地域ほど、良好な地域である」も事前で1.28、事後で1.30と高い得点となっている。この項目はソーシャルキャピタル<sup>3</sup>の重要性の理解を問うことを意図していたものでもあり、多くの人がソーシャルキャピタルの高い地域が良好な地域と理解をしていると思われる。

これら項目は「事後アンケート」で得点が高い。ただしソーシャルキャピタルの項目は、「大いに賛成」が事前の44.9%に対し、事後で39.7%に低下しており、議論の後、ソーシャルキャピタルの重要性が低下している。この理由としては議論の中で、地域に存する信頼関係などよりも、担い手についての内容が重視されたことが考えられる。

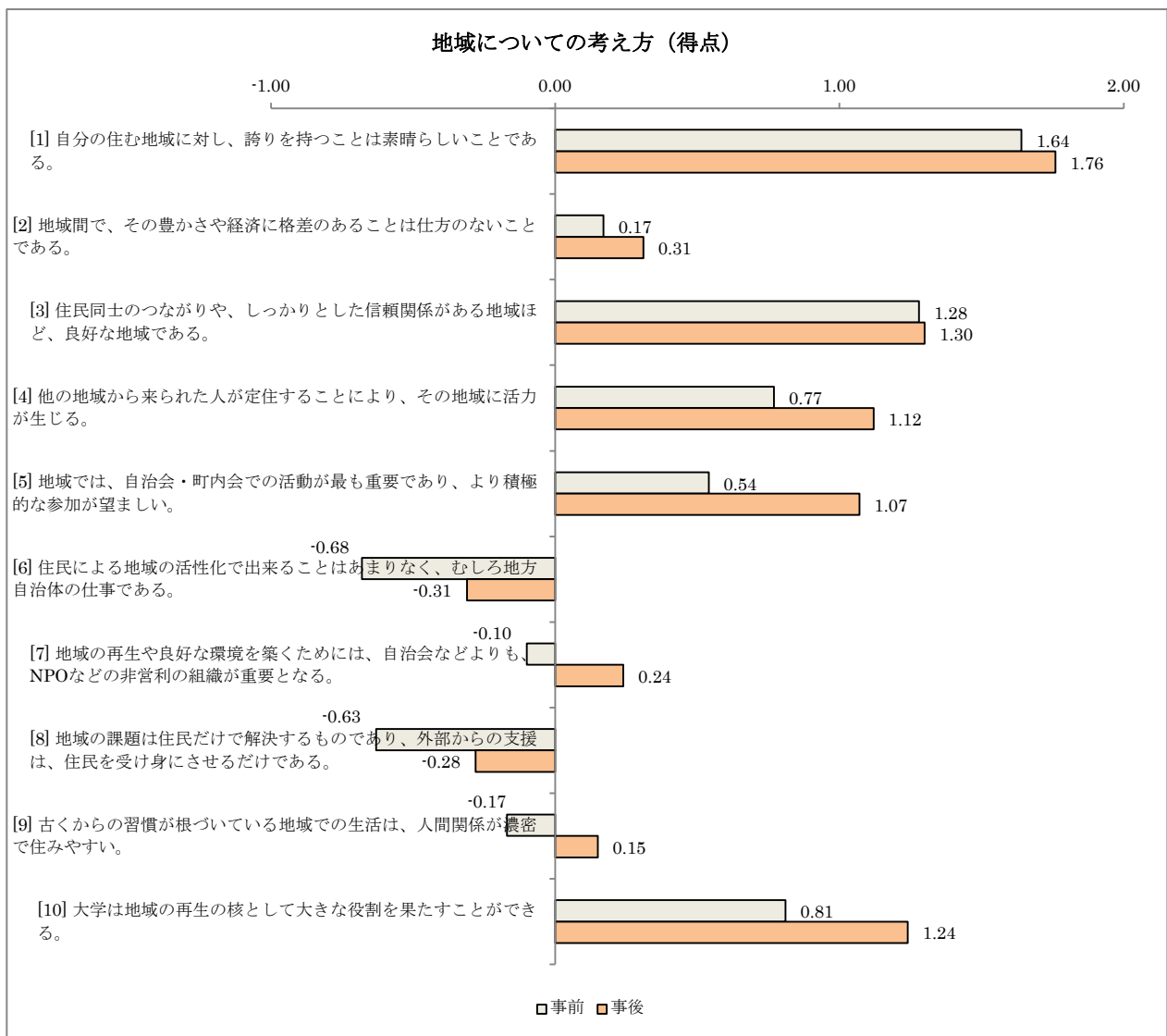


図5-4-4 地域についての考え方

<sup>3</sup> ソーシャルキャピタルは、社会関係資本などと訳される。アメリカの政治学者のパットナムらが提唱したもので、地域において住民の間の互恵性やネットワーク、信頼感などで構成され、ソーシャルキャピタルが十分に存在することで社会、経済の活動に良好な基盤となる。

これに対し、賛否が分かれたと思われる項目が、経済や豊かさを基盤とした場合の「[2] 地域間で、その豊かさや経済に格差のあることは仕方のないことである」である。格差があるから活性化への意識が生じるとの考えである。これについて、事前では0.17であり、「大いに賛成」10.3%、「やや賛成」24.4%、「普通」42.3%、「やや反対」15.4%、「大いに反対」6.4%と、中立的な回答が多い。所属による違いは特に見られない。地域間格差の存する事実は認められるが、これを肯定することの是非での悩みもあったのではないか。事後では得点が0.31と上昇している。アンケートの結果では中立を示す「普通」は、事前アンケートの42.3%から事後アンケートの33.3%に低下し、「大いに賛成」「やや賛成」の合計は、34.7%から41.0%に上昇している。

さらに「[9] 古くからの習慣が根づいている地域での生活は、人間関係が濃密で住みやすい」という項目も、得点が、事前アンケートの場合で-0.17、事後アンケートでは0.15となり、またそれぞれのアンケートでの「普通」の回答は52.6%と47.4%で、中立的な回答が多い。この設問は、従前の農村型のコミュニティが地域の基盤となるかを問うものである。若年者ほど、反対が多いと考えられるが、年齢階級別の得点に差は見られない。

このように、地域の基盤としては、地域の誇りとソーシャルキャピタルが重視されていることがわかる。しかし、経済的基盤や従来型のコミュニティについては、中立的な意見が多い。ところで、地域の誇りはしばしば伝統や歴史に由来することもあり、これらは従来型のコミュニティとも深く関わる。地域の誇りが何に由来するものかなど、今後の検討課題ともなる。

第二の内容は、地域活動の担い手に関することで、次の設問項目である。

[4] 他の地域から来られた人が定住することにより、その地域に活力が生じる。

[5] 地域では、自治会・町内会での活動が最も重要であり、より積極的な参加が望ましい。

[6] 住民による地域の活性化で出来ることはあまりなく、むしろ地方自治体の仕事である。

[7] 地域の再生や良好な環境を築くためには、自治会などよりも、NPOなどの非営利の組織が重要となる。

[8] 地域の課題は住民だけで解決するものであり、外部からの支援は、住民を受け身にさせるだけである。

[10] 大学は地域の再生の核として大きな役割を果たすことができる。

注目すべきは、自治体の役割である。項目は、「[6] 住民による地域の活性化で出来ることはあまりなく、むしろ地方自治体の仕事である」で、マイナス、あるいは得点が低い項目となっている。「事前アンケート」では得点が-0.68、「事後アンケート」で-0.31である。実際、「事前アンケート」の結果は「やや反対」が50.0%、「大いに反対」が15.4%と3分の2を反対意見が占める。地域に関心がある方が集まっており、地域のことを自治体だけに任せることには反対が多い傾向が確認できる。

この項目について所属別で区分して興味深いのは、「行政関係」の反対が大きいことである。事前アンケートの回答を見ると「行政関係」(N=13)では「やや反対」が69.2%、「大いに反対」が23.1%となっている。これに対し、自主的な地域運営に関心があると思われる「民間・市民活動」(N=14)では、

「やや反対」42.9%、「大いに反対」14.3%と反対意見がむしろ少ない。自治体の関係者は、住民にできることは多いと考えており、民間や市民活動に従事する方は、自治体にできることがより多いと考えている。「事後アンケート」の結果も得点はマイナスであり、傾向としては、行政よりも自らの手で進めたいとの思いはあるが、その得点は事後で増える。「大いに賛成」「やや賛成」の合計は10.3%から、23.1%に上昇、逆に反対は65.4%から48.8%に低下している。

「[8] 地域の課題は住民だけで解決するものであり、外部からの支援は、住民を受け身にさせるだけである」は、住民自らのみを担い手として考え、やや極端に取られるかもしれない意見として挙げた。得点は「事前アンケート」では-0.63とマイナス値となっている。住民は自らなすことも多いが、外部の支援は不可欠と考えていることがわかる。また、事後の数値も-0.28であり、外部の支援がマイナスにはならないとの考えを持っているとも思われる。

年齢階級別・地域についての考え方(得点)

	20歳未満		20歳以上 40歳未満		40歳以上 60歳未満		60歳以上	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後
[1] 自分の住む地域に対し、誇りを持つことは素晴らしいことである。	1.53	1.69	1.85	1.75	1.60	1.71	1.63	1.93
[2] 地域間で、その豊かさや経済に格差のあることは仕方のないことである。	0.16	0.25	0.20	0.35	-0.10	0.14	0.31	0.47
[3] 住民同士のつながりや、しっかりとした信頼関係がある地域ほど、良好な地域である。	1.22	1.22	1.25	1.35	1.10	1.00	1.56	1.53
[4] 他の地域から来られた人が定住することにより、その地域に活力が生じる。	0.66	1.00	0.85	1.05	0.80	1.29	0.88	1.40
[5] 地域では、自治会・町内会での活動が最も重要であり、より積極的な参加が望ましい。	0.50	0.88	0.55	1.25	0.60	1.14	0.56	1.20
[6] 住民による地域の活性化で出来ることはあまりなく、むしろ地方自治体の仕事である。	-0.53	-0.22	-0.95	-0.75	-0.60	0.14	-0.69	-0.13
[7] 地域の再生や良好な環境を築くためには、自治会などよりも、NPOなどの非営利の組織が重要となる。	-0.22	0.25	-0.15	0.05	0.20	0.57	0.00	0.33
[8] 地域の課題は住民だけで解決するものであり、外部からの支援は、住民を受け身にさせるだけである。	-0.59	-0.13	-0.85	-0.50	-0.30	0.14	-0.63	-0.53
[9] 古くからの習慣が根づいている地域での生活は、人間関係が濃密で住みやすい。	-0.09	0.09	-0.05	0.40	-0.30	0.00	-0.38	0.00
[10] 大学は地域の再生の核として大きな役割を果たすことができる。	0.38	0.97	1.05	1.35	0.90	1.43	1.31	1.60
回答者数	32		20		10		16	

表 5-4-2 年齢階級別・地域についての考え方

所属別・地域についての考え方(得点)

	行政関係		民間・市民活動		高齢者大学		高校生		大学生	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後
[1] 自分の住む地域に対し、誇りを持つことは素晴らしいことである。	1.77	1.73	1.79	2.00	1.50	1.88	1.46	1.68	1.80	1.67
[2] 地域間で、その豊かさや経済に格差のあることは仕方のないことである。	0.00	-0.09	0.36	0.67	0.25	0.50	0.22	0.32	0.00	0.20
[3] 住民同士のつながりや、しっかりとした信頼関係がある地域ほど、良好な地域である。	1.31	1.09	1.36	1.42	1.38	1.63	1.18	1.18	1.33	1.40
[4] 他の地域から来られた人が定住することにより、その地域に活力が生じる。	0.77	0.91	0.86	1.58	0.88	1.25	0.61	0.96	0.93	1.13
[5] 地域では、自治会・町内会での活動が最も重要であり、より積極的な参加が望ましい。	0.77	1.00	0.43	1.25	0.38	1.13	0.46	0.89	0.67	1.27
[6] 住民による地域の活性化で出来ることはあまりなく、むしろ地方自治体の仕事である。	-1.08	-0.82	-0.57	-0.17	-0.88	-0.38	-0.46	-0.11	-0.73	-0.40
[7] 地域の再生や良好な環境構築ためには、自治会などよりも、NPOなどの非営利の組織が重要となる。	0.31	0.36	0.21	0.50	-0.50	-0.13	-0.18	0.32	-0.40	0.00
[8] 地域の課題は住民だけで解決するものであり、外部からの支援も、住民を受け身にさせるだけである。	-0.69	-0.18	-0.50	-0.67	-0.75	-0.50	-0.57	-0.07	-0.73	-0.33
[9] 古くからの習慣が根づいている地域での生活は、人間関係が濃密で住みやすい。	-0.31	-0.27	-0.36	0.33	-0.25	-0.25	-0.07	0.14	0.00	0.53
[10] 大学は地域の再生の核として大きな役割を果たすことができる。	1.08	1.55	1.36	1.58	1.00	1.38	0.29	0.93	0.93	1.27
回答者数	13		14		8		28		15	

表 5-4-3 所属別・地域についての考え方

外部の支援の重要性は、例えば「[4] 他の地域から来られた人が定住することにより、その地域に活力が生じる」の項目がプラスの得点であることからわかる。得点は、「事前アンケート」で0.77、「事後アンケート」では1.12と大きく上昇している。回答を見ても、「大いに賛成」「やや賛成」が事前の62.9%から、事後に79.5%へと約8割を占めるようになっている。「熟議」では、他の地域から来た学生も議論に参加しており、その行動や考え方から地域住民以外の方が関わることでの利点に気付く機会となったと思われる。特に「民間・市民活動」では、得点は事前の0.86から事後の1.58へと大きく上昇している。民間の立場では、自らが担い手との思いがある一方で、新たな担い手を迎え入れることの重要性に気付いたのであろう。

同じく、プラスの得点であり、同時に「事後アンケート」で得点が大幅に上昇したのは、「[10] 大学は地域の再生の核として大きな役割を果たすことができる」という項目である。0.81から1.24へと上昇をしている。アンケートの結果でも、「大いに賛成」「やや賛成」の合計は、事前で61.5%から、事後で77.0%へ上昇している。特に「高校生」では、「大いに賛成」が7.1%から、42.9%へと上昇をしており、実際に大学での熟議に参加することで、これまでは知らなかった大学の地域に果たす役割を認識したと考えられる。

さて、地域活動の担い手として、非営利の組織としては、自治会など地縁型で共益を重視する組織と、NPOやボランティアなどテーマ型で公益に重きを置く組織とがある。どちらをより重視するのかを問

う項目が、「[5] 地域では、自治会・町内会での活動が最も重要であり、より積極的な参加が望ましい」、及び「[7] 地域の再生や良好な環境を築くためには、自治会などよりも、NPO などの非営利の組織が重要となる」である。

得点を比較すると、「事前アンケート」の結果では、前者、つまり地縁型の組織を重視する項目が 0.54、後者の NPO などテーマ型組織の項目が -0.10 であることから、議論の前では、地縁型組織の方が重視されている。年齢階級で見ると、地縁型組織については、特に差が見られないのに対し、NPO などテーマ型組織では若年者に反対が多い。「20 歳未満」の回答で、「やや反対」が 25.0%、「大いに反対」が 6.3%を占めている。テーマ型の組織については「行政関係」と「民間・市民活動」で得点がプラスの値であり、期待が高い。既存の組織にはない役割を期待しているのである【表 5-4-2】。

議論の後、「事後アンケート」では、地縁型組織を重視する立場の得点は 1.07 に、またテーマ型組織を重視する項目についても 0.24 に上昇している。地縁型組織についての得点の変化を所属別にみると、「民間・市民活動」の 0.43 から、1.25 への上昇、また「高齢者大学」の 0.38 から 1.13 への上昇が顕著である。「民間・市民活動」では「大いに賛成」が、7.1%から 35.7%に拡大、「高齢者大学」でも 0.0%から 37.5%に拡大している。議論を通し地縁型組織が中心となるべきと強く感じた人が多かったと思われる。「高齢者大学」、「民間・市民活動」の回答者はいずれも自治会など地縁型の活動に従事している人が多かった。つまり、実際に活動をしているからこそ、課題を感じていると考えられる。一方で、テーマ型団体については、「高校生」「大学生」で、それぞれ -0.18 から 0.32 へ、また -0.40 から 0.00 へと上昇をしている【表 5-4-3】。

以上のように、地域活動では、地縁型組織を重視する考え方が一般的であり、その考えは議論の後に強化されているのである。

## 5. 自由記述欄の分析

「事前アンケート」については、「地域活動に関わり、よかったことは何か」についての、また「事後アンケート」については、「熟議について気づいた点や意見等」に関する自由記述欄を設けており、両記述欄への回答について考察する。

### (1) 地域活動との関わり

地域活動の利点として、人との交流や知り合いの数の増大など、人的ネットワークの拡大を上げる回答が多く、44 件あった自由回答の内、21 件が相当する。代表的な内容としては、「近所の人と親しくなった」「さまざまな人との交流ができた」「つながりができたこと」などがある。

自分自身の活躍の場が増えたと感じる人は、13 件の回答である。「地域の活性化に協力でき社会に貢献」「地域の中で、自分の存在を知ってもらっていることがわかった」「自分達で活動することにより、地域参画意識が高まる」など、社会貢献への自覚と自身の成長、またそこから得られることを記述して

いるものが多くみられる。例えば「地域の小さなグループ 10 人程に地域の歴史ガイドを行った時に意外と皆に受けた」「町内の呼びかけによる神社の清掃」などのように、具体的な内容を示す回答もある。

地域情報を把握することができたことを上げている内容も 8 件ほど見られる。例えば「地域の現状を知り、問題点を見つけることができた。その解決策を考えるきっかけとなった」「地域についてより知ることができた」「地域の人々が何を願っているかがいっくらか理解できた。色んな人々がいるので、答えは一つではなく、数限りない回答がある」などである。

以上のように、①地域の現状と課題を知り、②人とコミュニケーションをはかりつながり合い、③地域での活動を通しての自己成長と社会貢献、の重要性を指摘する内容が大半を占めている。

## (2)「熟議」についての気づき

「熟議」の、特に議論の段階での、交流や意見を多く聞いたことに関しての指摘が比較的多く、29 件の記述の中で 16 件を占めている。その中でも多世代の交流や違う世代の意見を聞く機会となったことを指摘する声も多い。例えば、「大学を中心に世代を超えて交流できる素晴らしいイベントでした」「高校生も多く、同じテーブルで意見を聞くことができ非常に参考になりました」「大人の方とたくさんお話しできる機会がもらえてよかった」「違った立場の方の様々な意見を聞くことができ、視野を広げることができました」などがある。

コミュニケーションのことや実行に至る内容など、「熟議」の本質に関わる意見も見られる。「コミュニケーションが取れて楽しい熟議でした」「自分の意見をたくさん発言することができた」「今回の意見を進めていけるようがんばります」「防災は学生、老人のチームワークが大切です」などの内容である。これらは議論だけではなく、議論で得られた結論を踏まえ、自分自身は何を実行すべきかも含め、「熟議」の意義を自ら見出しているものと思われる。

さらに、「熟議」そのものへの意見と、進め方に対する意見もある。前者の例を挙げると、「年に一度というのではなく、継続して回数を増やしていく」「議論だけに終わらず、啓発→行政への要請→実現へと課題テーマの完結を願う」と、熟議を地域課題の解決策を見出すための主要な手段とする提案として捉えることができる。後者についてはより具体的に、「まとめの時間より練りの時間が少なかった」「討議するテーマが漠としたもので人によって理解の内容に大きな幅がある」「人に影響を与える話し方など事前にレベルアップを図れないか」と、進め方に対する意見が多くある。

「事後アンケート」の自由記述は、①「熟議」を通して多くの人の意見を聞き交流するという、コミュニケーション手段としての役割を認識したことや、②「熟議」での結果を実行に移す、また議論を通しての合意形成を考えるなど、熟議手法の本質に関する意見、そして、③「熟議」を兵庫大学の持つ武器として地域課題解決に積極的に踏み出すという提言、といった内容に区分される。

「熟議」を継続して開催してきている本学には、今後これらの課題に真摯に向き合い解決することが求められている。

(田端和彦)





## 第6章 熟議に参加した学生と高校生

### ～変化と成長～

#### 1. 大学生の「熟議」による変化と成長

現代の学生は、現実の社会を実感できる機会が少ない。アルバイト先や単発的なボランティアなどで経験するのは、限定的な人間関係である場合が多いであろう。熟議は、地域の人々、大人や高校生、行政やNPOなどさまざまな機関の関係者などが集い、自由に意見交換する場である。

学生が、そこで出会うのは、地域を支えている人々であり、地域を愛する高校生であり、地域の今後を憂える高齢者であるかもしれない。熟議は、学生が、これらの人々の熱い想いを直接的に感じたり、自分の立ち位置や考えを確認したりすることにより、自分のなかのさまざまな能力を発見したり、自分のなかの変化を自覚できる機会となっている。

本節では、そのような前提に立ち、熟議の事前と事後におこなった自己認識シートや事後アンケート、自由記述をデータとして、学生の変化や成長の様子を記述し、分析する。ただし、あくまでも自己評価であることに留意し、数値だけでなく自由記述による生の声を突き合わせながら、学生の内部に起こったことを描いて行くことにする。

2013年度の熟議では、大学生はワークショップの参加者として16名、ファシリテーターとして12名が参加している。2012年度は、ファシリテーターとしてのみ16名が参加していたが、必要に応じて昨年度との比較も参考にする。

##### (1) 「熟議」を通してどのような能力に変化があったのか

###### 1) ワークショップ参加学生（以下、適宜「WS学生」と表記）

ワークショップに参加した学生の自己認識シートをみると、10項目のうちもっとも伸び率が高いのは、「思考力」であり、5点満点（5段階尺度）で+0.82となっている。前半1時間、後半1時間という短時間ながらも密度の高い議論を通して、社会人や高校生、教員など多様な人々と対等にしかも臨機応変に意見を出していくことのできる力、思考力がもっとも強く認識されたようだ。つづいて、「交渉力」の+0.62、「運営力」+0.50の伸びが目立っている【図6-1-1】【表6-1-1】。

一方、「貢献性」は+0.06と最も低い伸びとなっている。「貢献性」のワーディングは『社会の担い手として役割を自覚して、参画する力』であり、シートには評価5の目安として『地域や社会の担い手として、使命感をもった取組みができる』が記載されている【p97 自己認識シート参照】。「貢献性」に関しては、議論を通して、行動レベルまでの自己認識に至らなかったことがうかがわれる。

これらの学生のうち、4名は以前にワークショップ参加の経験があるが、経験のないグループとの伸び率に差は見られなかった。数回程度のワークショップ経験では、メンバー構成やテーマによっても得られること、学んだ内容についての手応えが異なってくるのが予想される。また、このことが能力項目の評価にも影響を与えることも考えられる。

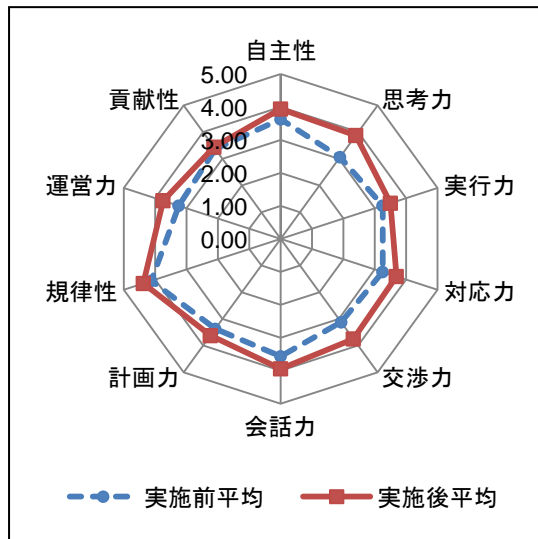


図 6-1-1 WS 学生の能力の変化

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減(※)
自主性	3.63	3.94	+0.31
思考力	3.06	3.88	+0.82
実行力	3.25	3.50	+0.25
対応力	3.25	3.69	+0.44
交渉力	3.13	3.75	+0.62
会話力	3.56	3.94	+0.38
計画力	3.38	3.63	+0.25
規律性	4.13	4.38	+0.25
運営力	3.25	3.75	+0.50
貢献性	3.38	3.44	+0.06

表 6-1-1 WS 学生の能力の変化

## 2) 学生ファシリテーター

ファシリテーターはワークショップの進行役である。事前の研修では、「自分の意見を出すのではなく、参加者が積極的に意見を出せるよう、議論や雰囲気が盛り上げる」媒介者としての技術を学んでいる。

学生ファシリテーターで最も伸びている力は、WS 学生と同様「思考力」の+0.58であり、「交渉力」+0.33、「規律性」+0.34と続いている。全体として、大学生の参加者や高校生と比較して、どの項目も伸び率が低くなっている【図 6-1-2】【表 6-1-2】。

WS 参加者に比べ、ファシリテーターはある意味では、自主性、実行力、対応力、会話力など自己認識シートにある 10 項目すべてを持ちあわせていなければならない【p97 自己認識シート参照】。すなわち、担当したテーブルの進行がうまく行けば、多くの能力項目が伸びることになるであろうし、その逆にどこかでミスがあったり、全体として不成功の印象があったりすれば、すべての能力項目が低く評価されることが起こるのである。事前研修を通して、他者の意見に耳を傾けながら、あるグループをひとつの方向性に導く技術修得の難しさを実感しているだけに、もともとの目標設定が高く、満足度が低くなり、自己評価が辛くなりやすくなったとも言えよう。

なかでも、「計画力」が-0.08とマイナス評価であることが気になる。ファシリテーターは、ファシリテートする技術は学ぶが、議論するテーマや内容についてそれほど馴染みがない場合もある。また、実際のワークショップでは、さまざまな立場の人がさまざまな角度から意見を交わす。そのとき、どのよ

うな対応をするのか、時間内にどう議論を収めていくのかなどについて、熟議プロジェクトの計画的段階から準備に関わっていなかったことがこの数字に表れていると見ることもできる。ファシリテーター養成を含むプロジェクト運営の次年度への課題と言えよう。

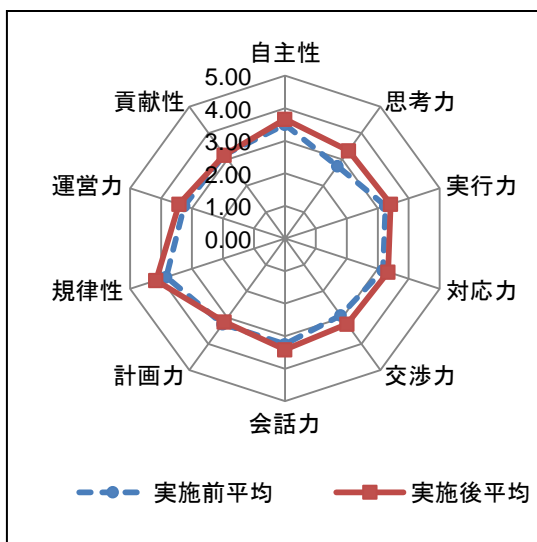


図 6-1-2 ファシリテーターの能力の変化

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.50	3.67	+0.17
思考力	2.75	3.33	+0.58
実行力	3.25	3.42	+0.17
対応力	3.17	3.33	+0.16
交渉力	2.92	3.25	+0.33
会話力	3.25	3.42	+0.17
計画力	3.25	3.17	-0.08
規律性	3.83	4.17	+0.34
運営力	3.25	3.42	+0.17
貢献性	3.17	3.17	+0.00

表 6-1-2 ファシリテーターの能力の変化

ここで、これまでファシリテーターの経験があるかどうかでみた場合、能力の伸びに関する違いはみられるかみてみよう。ファシリテーター12名のうち、6名はすでに1~2回の経験を持っている学生であった。10項目の伸び率を経験の有無別に平均してみると、経験者グループの伸び率の最低点から最高点が(+0.2)~(+0.8)であるのに対して、未経験者グループは(-0.7)~(+0.3)となっている。経験を積むほど、自己評価が高まることがわかる。

2012年度の熟議の学生ファシリテーターの評価では、「交渉力」+0.86、「運営力」+0.79、「規律性」+0.71と、全般的に評価が今年度と比べて高めである。2013年度の10項目の事前事後の差の平均が+0.2であるのに対して、2012年度は+0.49となっている。学生が、評価項目の内容(規準のワーディング)をどのように理解するのか、ファシリテーターの役割がどのように説明されたのか、熟議のテーマや参加メンバーによって経験の成否や印象が異なってくるのかなど、自己評価が左右される要因について、検討していく必要がある。

そこで、次に、事後にワークショップ型で行った振り返りの具体的内容(自由記述)から、熟議による体験について、より直接的な感想や意見をみていくこととする。

## (2) 学生は「熟議」という経験をどう捉えているか ~自由記述から~

### 1) 意見の交換や進行等についての振り返り

グループワークでは、まず「①グループでは、意見を出し合い、話したいことを全て話すことができましたか」について話し合ってもらった。

#### 【WS 参加者】

全体としては、意見をきちんと言えており、グループによっては、事前の準備（強みや弱みについての考えをまとめる）がよくなされており、スムーズに話し合いが進んだとの実感もみられる。

しかし、議論が上手く進み、白熱するほど、「もっと時間があれば深い議論ができたのではないか」との意見が複数出されている。また、「大まかな構造を整理するところが中心になったため、具体的な意見を出すところまで至らなかった」との感想が寄せられている。限られた時間で、意見を分類し、カテゴリー化することに重きがおかれていたことが、グループ討議全体に慌ただしい印象を与え、満足度の低さにつながったようである。

#### 【ファシリテーター】

進行については、主に2点の問題が挙げられた。

一つ目は、「テーマ全体の流れを参加者にうまく伝えることができなかった」点である。これについては、学生が熟議のテーマ内容をきちんと理解していなかった（事前研修において、時間的余裕がなかった）ことが反省点として挙げられよう。そのため、ほとんどのファシリテーターが、シナリオの台詞に気を取られ、自分の言葉で伝えることができていなかったようである。

二つ目は、参加者が積極的に議論に参加し、話し合う場の雰囲気づくりについてである。参加者の発言への「うなずき」を意識した学生は多かったようである。しかし、場の雰囲気を支配しがちな大人の参加者への対応、消極的になりがちな高校生への対応については、苦慮したようである。テーブルについている参加者がバランスよく発言できる工夫についての反省が多くなされている。

なかには、「沈黙がつづいたときには、すでに出た意見を、表現を変えて繰り返して理解を深めたり」と臨機応援に対応したり、「自分はこんなことも出来るんだ！という自信にもつながりました！」と自分のなかの新しい能力を自覚した学生も見られる。

つぎに、「②参加したメリットはどこにありましたか。」について話し合ってもらった。

#### 【WS 学生】

WS 学生は、ファシリテーターとは異なり、意見を出したり、他のメンバーと交流をする観点から感想を書いている。2点ほどにまとめられる。

一つ目は、自分の意見を述べて、受け入れてもらった喜びの一方で意見を出せないでいる参加者への配慮不足への反省など、コミュニケーションのあり方に関するものである。「聞く姿勢（しっかりうなずく、反応する）で話す内容の濃さも異なると感じました」「…そのような否定をしない、相手の話を最後まで聞くなど、これからの就活や社会に出てからも重要になる知識を得る事ができて良かった」

ったです」といった気づきを得た学生もいる。

二つ目は、さまざまな年齢や職業の方々との交流から学んだ点である。「シニアの人でも勉強熱心で大学に通っている人や、地域での様々な活動に取り組んでいる人や、役所でまだ知らない取組みをされていることなどを知れて、とても貴重な経験、交流となった」「個々人によって意見がそれぞれであることがわかったし、個人の意見も年代や性別など生活の形が近いほど似てくるものがあることが見えた」と記述している。

全体として、議論を通して、知らない人との出会い、初めての方と話し合うことで知り合いになれる喜びが感じ取れる。また、これから出て行く社会の様子をイメージする手がかりも掴んだようである。

### 【ファシリテーター】

自己認識シートでは、「思考力」、「交渉力」、「規律性」が伸びていた。自由記述でも、いろいろな意見をきいたり、まとめたりすることの能力が身についたことが書かれている。たとえば、「今回知らない人達との交流で、最初は恥ずかしさ、緊張、うまくまとめられない不安でいっぱいだったけど、最終的にはそれも減ったかなと思う」「ファシリテーターで、グループをまとめる、進行する、という力を学ぶことができて、…」とある。「規律性」の指標として設定している『異なる立場を理解しながら社会のためのルールや約束を結ぶことができる』も学びとっていることがわかる。

また、世代間の意見のちがひ、地域ごと（加古川地域とそれ以外の地域の比較）の課題の特色などに気がついた学生も複数見られる。また、これらの議論を通して、自分自身がこれから何かの課題に取り組もうとする意欲や方向性についてのヒントを得た学生もいた。たとえば、「聞く話すだけじゃなくて何か始めてみたいと思うきっかけにもなった」という。

全体として、議論をまとめ上げる手助けをする責任を背負うことにより、良い意味でいやおうなく変化する自分を感じるとともに、自分のなかの課題を確認し、自信をもって学生生活を送ろうとする意欲に影響があった様子がうかがわれる。

## 2) 熟議に参加する意義について

ここでは、「熟議終了後の学生用アンケート調査」【p116 参照】から、以下の質問の結果についてみていく。

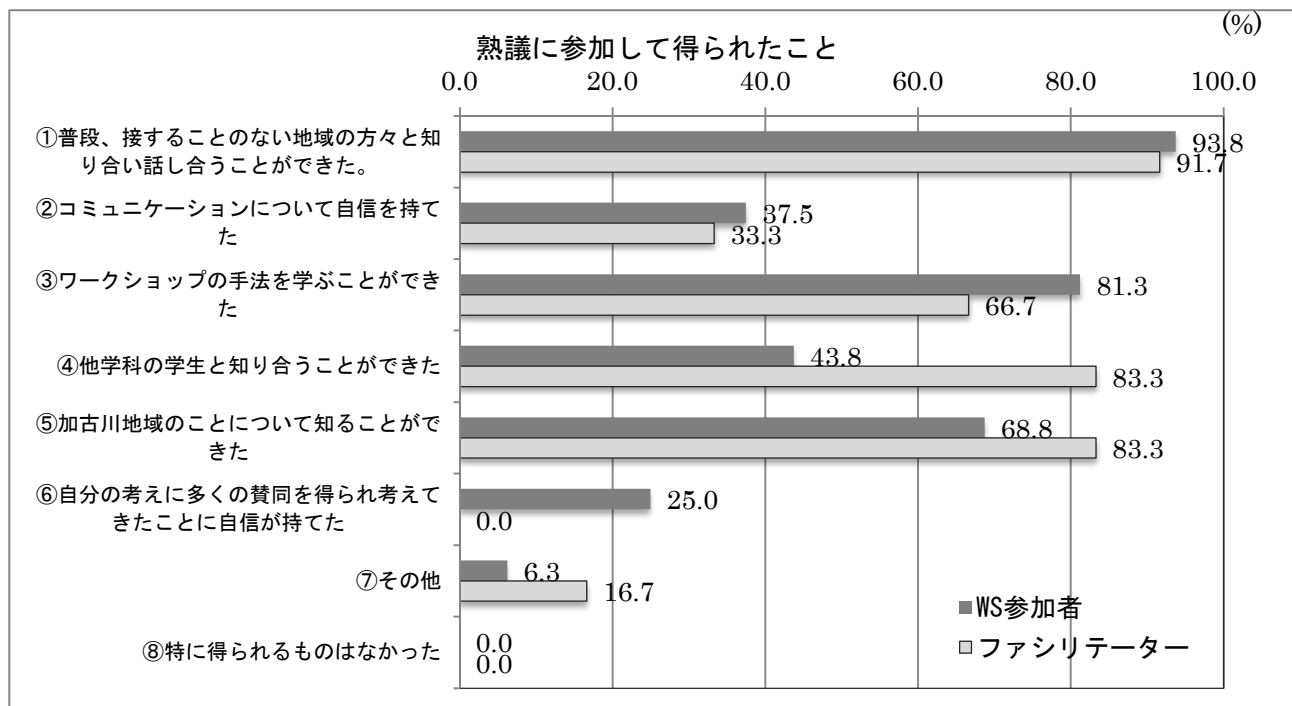


図 6-1-3 熟議に参加して得られたこと

WS 学生もファシリテーターも、「普段、接することのない地域の方々と知り合い話し合うことができた」ことがもっとも高い数値となっている。両群の差に注目すると、WS 学生のほうが、「ワークショップの手法を学ぶことができた」とする比率が 15 ポイント近く高くなっている。これは、WS 参加者の 4 分の 3 はワークショップ初体験であるということが影響していると考えられる。

一方、「他学科の学生と知り合うことができた」については、ファシリテーターの大半が肯定している。学生同士のネットワークづくりや専門性の異なる学生同士の交流に役立つイベントとしても熟議を捉えることができよう。

### 【今後、熟議などのワークショップに参加をする意向はありますか】

今後、熟議などのワークショップに参加をするかどうかについては、WS 学生は約 80%が「時間や都合が合えば参加したい」と答えているが、残りの約 20%は「参加をしたいが学業が忙しくてできない」としている。一方、ファシリテーターでも約 80%が「時間や都合が合えば参加したい」と答えており、「今後のワークショップに必ず参加したい」とする約 10%と合わせて約 90%が参加に前向きであり、ファシリテーターの役割の充実度が感じられている【図 6-1-4】。今後、学生が参加しやすくするために、正規カリキュラムおよび課外活動などとして位置づけるなど、多様な形態を検討する必要がある。

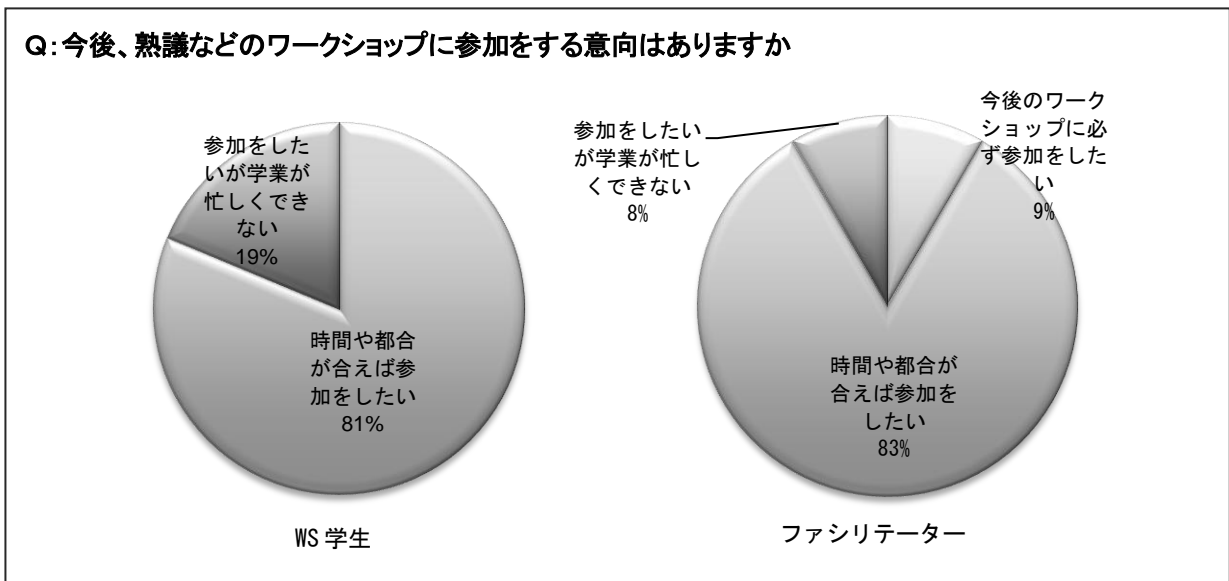


図 6-1-4 今後、熟議などのワークショップに参加をする意向はありますか

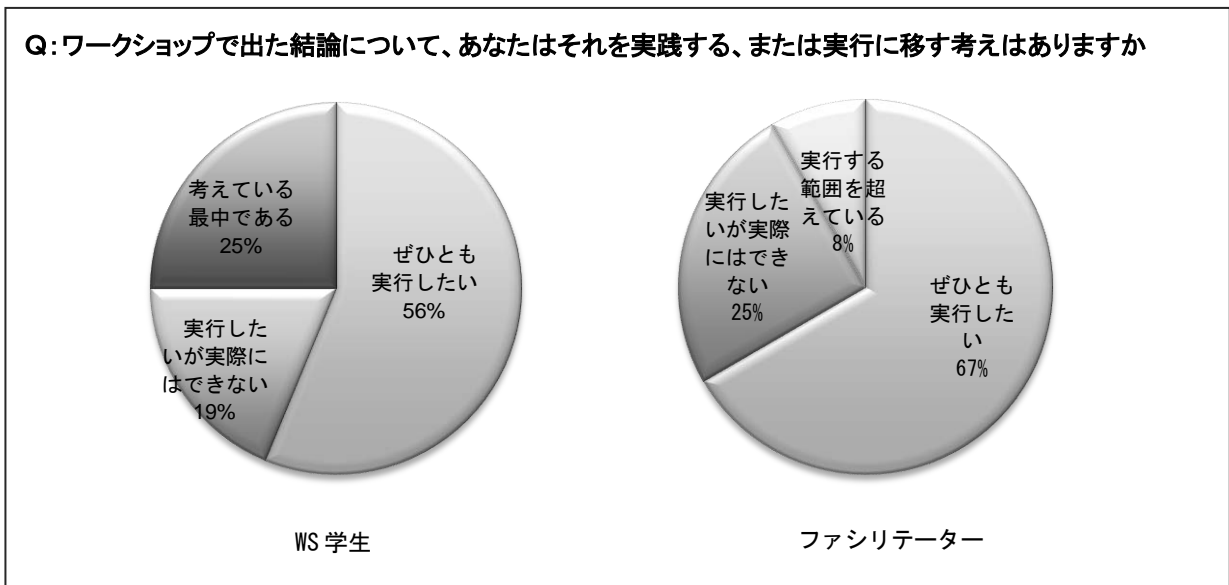


図 6-1-5 ワークショップで出た結論について、あなたはそれを実践する、または実行に移す考えはありますか

**【ワークショップで出た結論についてどう感じましたか】**

**【ワークショップで出た結論について、あなたはそれを実践する、または実行に移す考えはありますか】**

「ワークショップで出た結論について」は両グループとも、90%前後が大いに賛同している。また、「ワークショップで出た結論について、あなたはそれを実践する、または実行に移す考えはありますか」については、「ぜひとも実行したい」WS 学生が 56%、ファシリテーターが 67%と比較的高くなっている【図 6-1-5】。ファシリテーターは進行役に徹する役割であるが、参加者の共通理解、合意をまとめあげた実感が課題解決への意欲を強化することに作用しているのかもしれない。

### (3) まとめ

自己認識シートの評価では、WS 学生は「思考力」「交渉力」「運営力」が伸びており、ファシリテーターは、「思考力」「交渉力」、「規律性」が伸びている。注目すべきは、WS 学生の方が伸び率が高いということである。上の(2)の自由記述の分析でも見たとおり、WS 学生は、自分の意見を発表し、他者の意見を聴き、学び、交流し、課題を発見するなど、多様な能力が含まれている経験をしていると言える。これに対して、ファシリテーターは、進行役に徹し、最終的に議論を成功させ、まとめるところまで導くことに集中しなければならない。このことから、WS 学生ほど余裕がなく、反省事項が自ずと増えてしまっているのではないか。その結果、自己評価は伸び悩むことになる。

そこで、今後の熟議に参加する学生に関しては、ファシリテーターの養成が課題として浮かび上がってくる。上でみたように、経験を積むほどに自己評価が高くなることは自然なことである。しかし、今回はシナリオ自体をよく理解できなかったファシリテーターが多かった。解決策としては、プロジェクトの初期、テーマ決定時から学生に参加してもらい、テーマを自分のものとして感じてもらうことが考えられる。

また、「今後、熟議のようなワークショップに参加したいか」については、「時間が合えば」、「授業が忙しい」との意見が多く見られた。今後、大学教育では、アクティブ・ラーニングに力を入れ、講義だけでなく演習形式の教育方法の開発が重視されていく方向性にある。熟議のようなイベントに単発的に参加させるだけではなく、学科カリキュラムあるいは全学レベルの科目に組み込む形で能力開発ができないか、今後の課題であろう。また、自由記述にあるように、学生同士のネットワークづくりや学び合いの成果にも注目しておく必要がある。

また、今回話し合われた、加古川地域の「強み」と「弱み」を理解したうえで、結論として得られた課題について、実践・実行する気持ちを持っている WS 参加者が 56%、ファシリテーターが 67%と高率である。事前準備をして、密度の高い議論を行うことで、地域への関心、活動参加の意欲が高まったことは個人的成果として素晴らしいことである。一方、熟議がより計画的で積み上げ型に実施されていくことが、地域の課題の発見と解決につながる可能性を高めると言う意味でも、今回は一定以上の成果を得たものとする。

## 2. 高校生の分析

### (1) 「熟議」に参加した高校生の特徴

今回参加した高校生は、加古川地域 2 市 2 町にある高校に通う生徒を中心とした公立高校 26 名と私立高校 2 名の計 28 名である（男子 12 名、女子 16 名）。また、学科でみると、普通科 23 名（うち理数科系 7 名）、その他（総合学科など）3 名、不明 2 名となっている。「熟議の内容を含めよく知っていた」生徒は 3.6%であり、今回の熟議参加で知ったとする者が 75%を占めている。



「熟議 2013 in 兵庫大学」に参加した理由は、「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」がほとんどである（96.4%）。それでは、熟議の本番であるワークショップの経験についてはどうであろうか。「ワークショップや市民会議、審議会、グループ討議の経験」をしたことがほとんどない者が 64.3%を占め、「機会が少ないが、現在でも経験することがある」「以前には経験したことがあるが最近はない」を合わせると 32.2%となっている。

また、今回のテーマである「地域」については何らかの関心や活動経験があったのだろうか。「過去 1 年間、あなた自身が居住されている地域に関わる活動の機会はございましたか」の問いでは、12 人（42.9%）が「機会があった」と答えている。平均的な高校生像から見れば、比較的高い数値と言えるのではないだろうか。その活動の具体的内容を複数回答でたずねたところ、「学校や職場の行事や事業としてある地域活動」（8 人）が最も多く、「地域に関わるボランティアや NPO での地域活動」（6 人）が第 2 位となっている。

ここまでのデータをみると、参加した高校生は「他の人に勧められて参加したが、ワークショップ形式の話し合いの経験は少ない。しかし、地域での活動経験のある者が 4 割を超えている」という特徴もっている。

事前アンケートによると、「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点は、「多様な考えを知る機会がある」（82.1%）と捉えており、悪い点は「わからない」が 25.0%、「議論だけではまとまらず決められない」（21.4%）と考えている。地域のさまざまな年齢層の人々が集い、直接的な話し合いの手法への期待や積極的な参加意欲がこの数値に表れていると思われる。

## (2) 高校生は「地域」についてどう考えているか ～熟議前と熟議後～

実際の議論を行う前に、地域についてある程度考えるプロセスを踏んでもらうための事前アンケートを実施した。これは、第 3 章で述べたように、「前もって、本やインターネットなど必要な資料を調べて情報を入力し、これまでの経験や知識を引っ張り出し、ワーキングメモリを準備状態にしておくウォーミングアップは必要」との考えからである。

以下では、地域についての考え方がどのように熟議前と熟議後で変化したのか見ていく。地域に対する 10 項目の考え方（設問）を示して、賛成か反対かをたずねた結果をひとつずつに見ていく。また、最後にこれらの項目を全体として考察する。

### 設問①「自分の住む地域に対し、誇りをもつことは素晴らしいことである」

「大いに賛成」が事前では 60.7%であったが、事後には 71.4%と 10 ポイント以上増えている。議論を通して、地域をより身近に感じることができたことに因るのではないだろうか。【図 6-2-1】

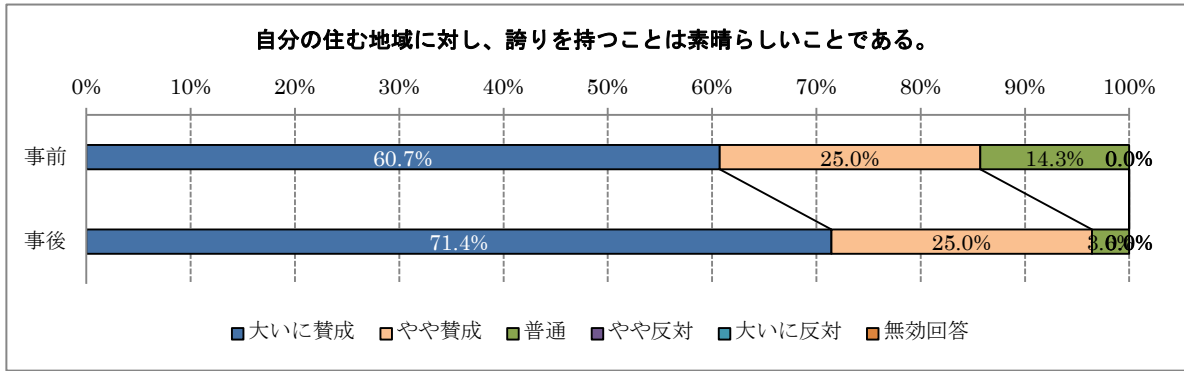


図 6-2-1 自分の住む地域に対し、誇りを持つことは素晴らしいことである

**設問②「地域間で、その豊かさや経済に格差のあることは仕方のないことである」**

「大いに賛成」は事前では 14.3%であったが、事後では、7.1%に減っている。一方、「やや賛成」が 25.0%から 46.4%へと大幅に増えている。この両方を合わせると、39.3%から 53.5%へと 15 ポイント近くも増加している。議論では、加古川地域の「強み」と「弱み」を話し合ったが、その結果は、「強み」と「弱み」が表裏の関係であったり、課題解決が見えにくかったりといったことを経験したことが事後の結果に影響を与えている可能性もある。【図 6-2-2】

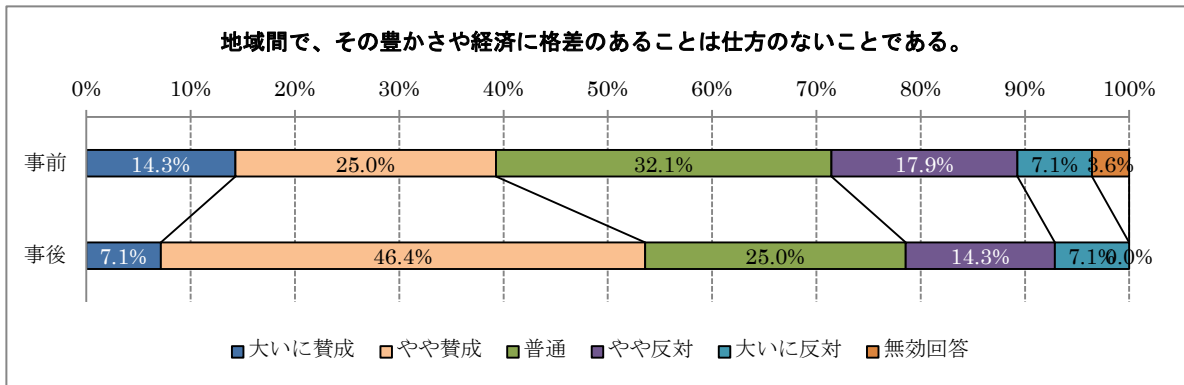


図 6-2-2 地域間で、その豊かさや経済に格差のあることは仕方のないことである

**設問③「住民同士のつながりや、しっかりとした信頼関係がある地域ほど、良好な地域である」**

46.4%と約半数が「大いに賛成」としており、「やや賛成」35.7%を含めると 80.0%を超える。やはり、地域には住民のつながりや信頼関係が重要と考えている。事後では、「大いに賛成」「やや賛成」の合計が 85.7%とやや増えた程度である。本項目は、地域に関するイメージの核のような考え方であることから、あまり変化が見られなかったと捉えることができよう。【図 6-2-3】

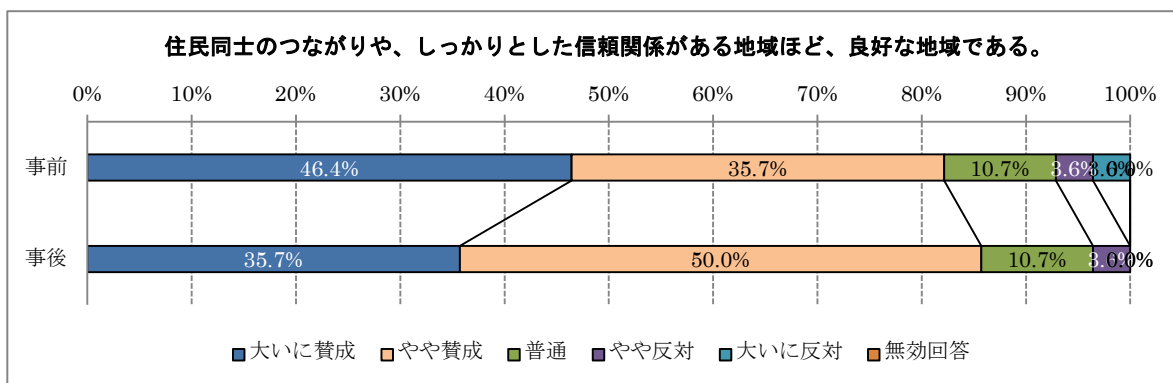


図 6-2-3 住民同士のつながりや、しっかりとした信頼関係がある地域ほど、良好な地域である

**設問④「他の地域から来られた人が定住することにより、その地域に活力が生じる」**

「大いに賛成」と「やや賛成」を合わせて見ると、事前では、50.0%であるが、事後では75.0%と他の参加者種別（行政、民間・市民活動、高齢者大学、大学）に比べて大幅に伸びている。他地域からの転入者に対しては若い世代の方が柔軟に対応できているのかもしれない。【図 6-2-4】

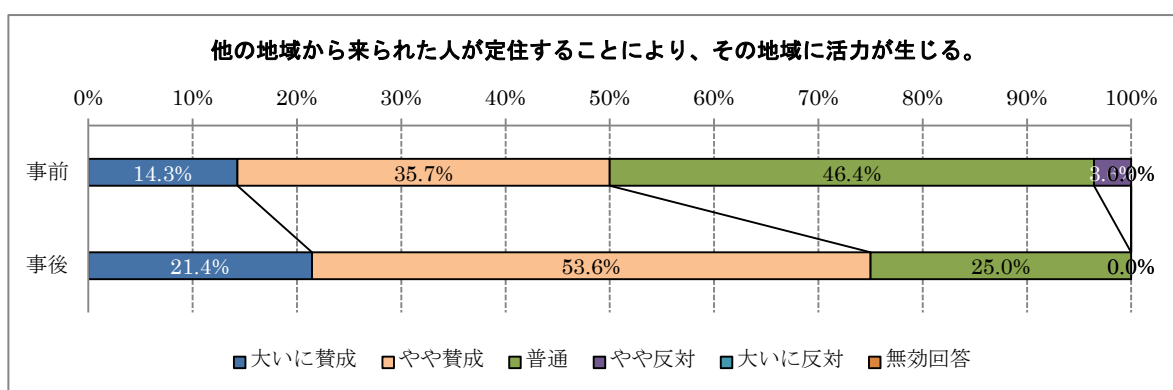


図 6-2-4 他の地域から来られた人が定住することにより、その地域に活力が生じる

**設問⑤「地域では、自治会・町内会での活動が最も重要であり、より積極的な参加が望ましい」**

「大いに賛成」と「やや賛成」を合わせて見ると、事前では、46.4%であるが、事後では71.4%と大幅に増加している。ここでも、地域の住民の方々から直にお話を聞くなかで、「地域」そのものを身近で現実的に捉えられたことが反映しているとも解釈できよう。【図 6-2-5】

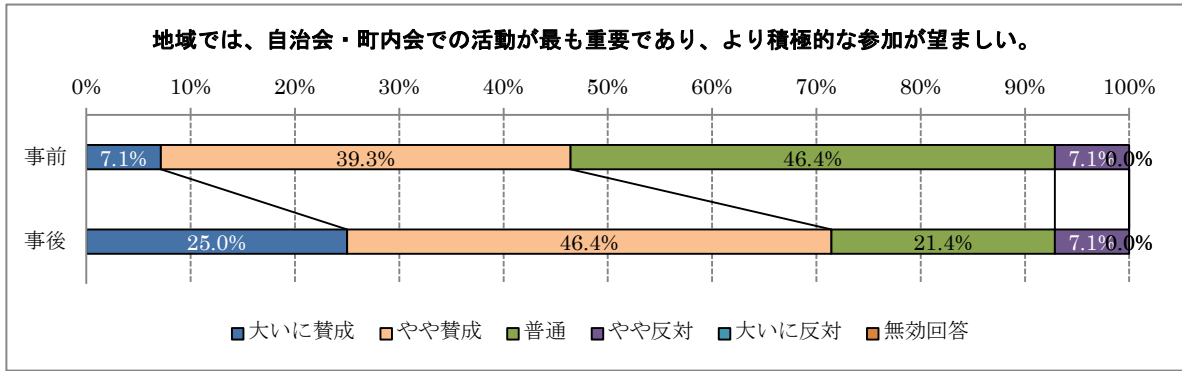


図 6-2-5 地域では、自治会・町内会での活動が最も重要であり、より積極的な参加が望ましい

設問⑥「住民による地域の活性化で出来ることはあまりなく、むしろ地方自治体の仕事である」

この考え方に「大いに賛成」する者は事前で、7.1%にとどまっております、「やや賛成」7.1%と合わせても14.2%である。一方、「やや反対」39.3%と「大いに反対」14.3%を合わせると53.6%である。事後には、「大いに賛成」7.1%と「やや賛成」21.4%を合わせて、28.5%と地方自治体への期待が増加している。地域の課題をだれがどのように解決していくのかを具体的に考える過程のなかで、ステークホルダーとしての行政の存在についても認識が高まったのではないかと考えられる。【図 6-2-6】

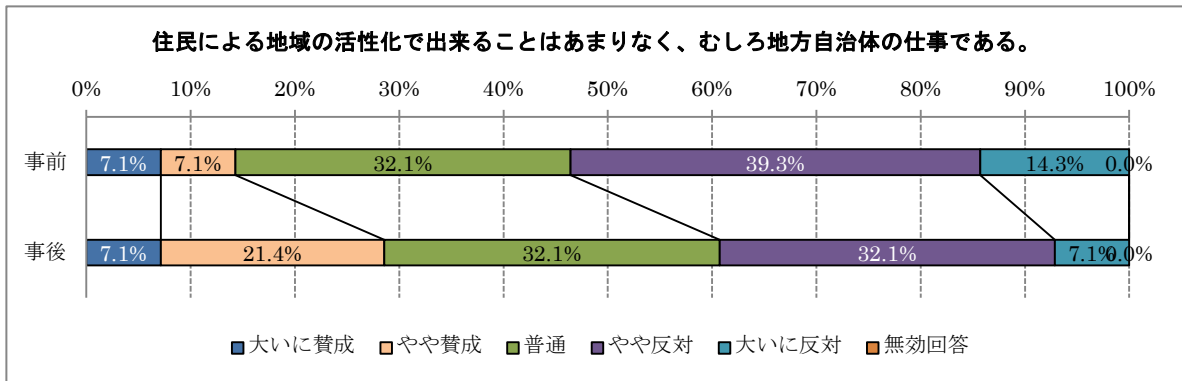


図 6-2-6 住民による地域の活性化で出来ることはあまりなく、むしろ地方自治体の仕事である

設問⑦「地域の再生や良好な環境を築くためには、自治会などよりも、NPO などの非営利の組織が重要になる」

事前では、「大いに賛成」7.1%と「やや賛成」3.6%を合わせても10.7%程度にとどまっていたが、事後では、「大いに賛成」7.1%と「やや賛成」32.1%を合わせて39.2%に達し、30ポイント近く増加している。今回の参加では、まず、地域におけるNPOや民間組織などの組織の存在を知ったこと、意見交換を通して、地域の問題解決のための新しい選択肢やヒントを得たことがこの結果を導いたのではないだろうか。【図 6-2-7】

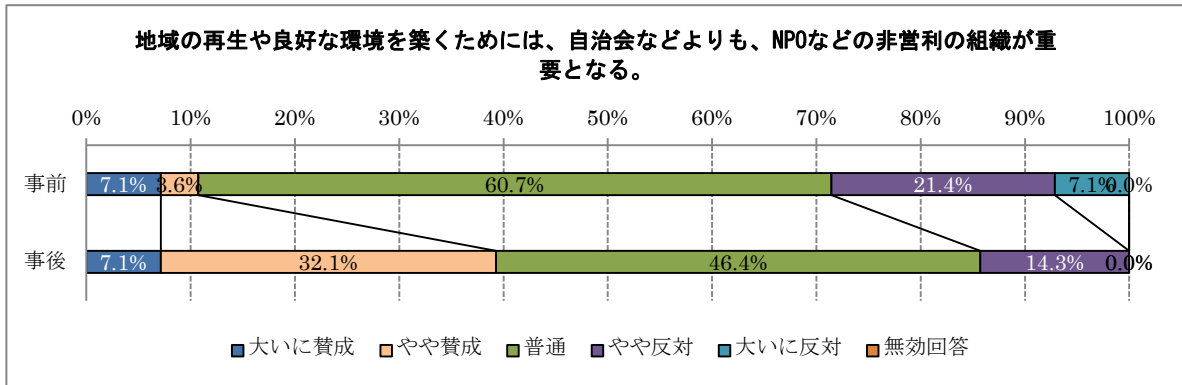


図 6-2-7 地域の再生や良好な環境を築くためには、自治会などよりも、NPO などの非営利の組織が重要となる。

設問⑧「地域の課題は住民だけで解決するものであり、外部からの支援は、住民を受け身にさせるだけである」

事前では、「大いに賛成」3.6%と「やや賛成」7.1%を合わせても10.7%程度にとどまっていたが、事後では、「大いに賛成」3.6%と「やや賛成」21.4%を合わせて15ポイント近く増加している。一方、「やや反対」「反対」を合わせると、事前の53.6%から、事後の35.7%へ減少していることから、外部からの支援が住民を受け身にすると考える高校生が増え、つまり外部からの支援に頼らず自分たちで解決する志向性が強められている傾向が見て取れる。【図 6-2-8】

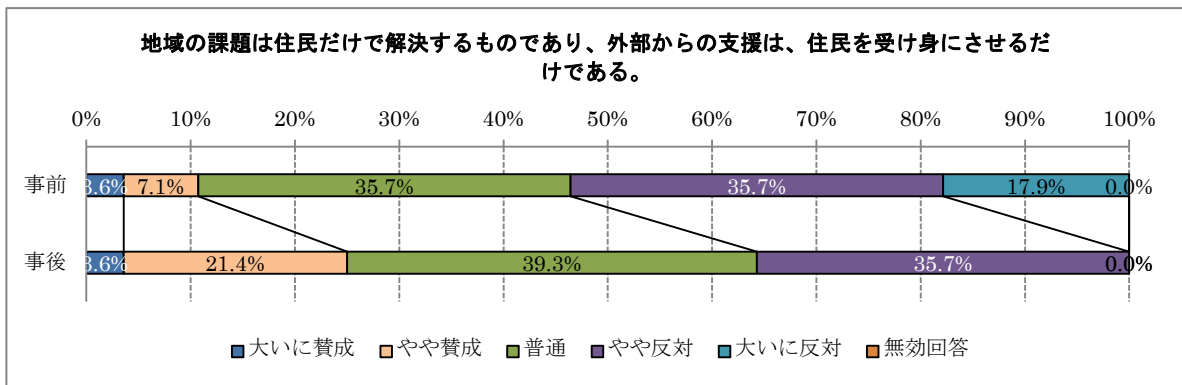


図 6-2-8 地域の課題は住民だけで解決するものであり、外部からの支援は、住民を受け身にさせるだけである

設問⑨「古くからの習慣が根づいている地域での生活は、人間関係が濃密で住みやすい」

事前では、「大いに賛成」7.1%と「やや賛成」17.9%を合わせて25.0%となっているが、事後では合計で35.7%と11ポイント程度増加しているのが目立っている。議論を通して、地域への愛着が増したり、地域のまとまりの良さに対する肯定的なイメージが増幅したとも考えられる。【図 6-2-9】

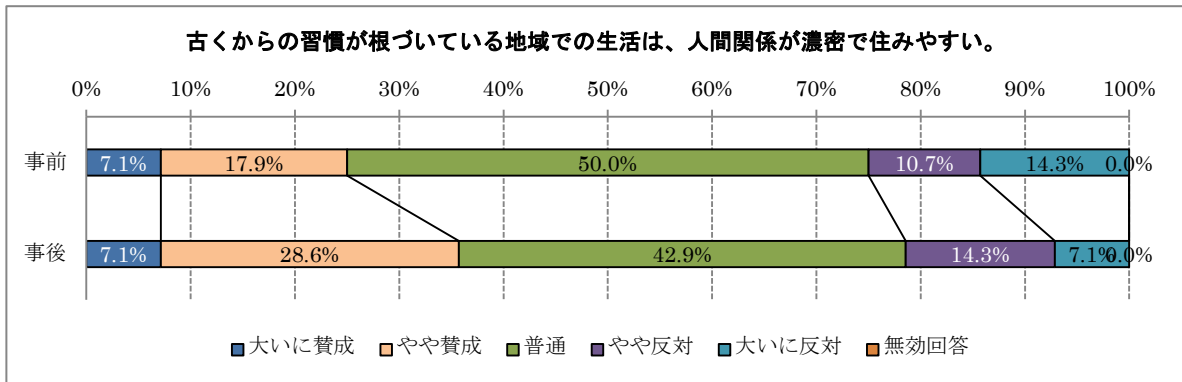


図 6-2-9 古くからの習慣が根づいている地域での生活は、人間関係が濃密で住みやすい

**設問⑩「大学は地域の再生の核として大きな役割を果たすことができる」**

事前では、「大いに賛成」7.1%と「やや賛成」28.6%を合わせて 35.7%となっているが、事後では合計で 60.8%と約 25 ポイント増加し、肯定派が過半数をはるかに超える変化が見られた。今回の熟議は大学が主催し、大学という場所で開催されていることの直接的な影響が大きかったのではないかと。「大学生」が 20.0 ポイント増、「高齢者大学」は 12.5 ポイント増、「民間/市民活動」では 7.2 ポイント増、「行政」はほとんど変化なしといった結果に照らしてみると、若いほど、議論を行ったことの影響が強い。

しかし、肯定の度合いでみると、「大学生」が 60.0%→80.0%、「高齢者大学」は 87.5%→100.0%、「民間/市民活動」では 78.6%→85.7%、「行政」は 84.6%→84.7%と、事後の数値は高校生がおおよそ 60%にとどまったのに対して、80.0~100.0%に達している。今後、大人たちが地域の課題解決に寄与する事業や施策を展開していくことへの多大なる期待が明らかである。一方、高校生の数値は大学についての充分なイメージをもつことができていないことの表れであろう。【図 6-2-10】

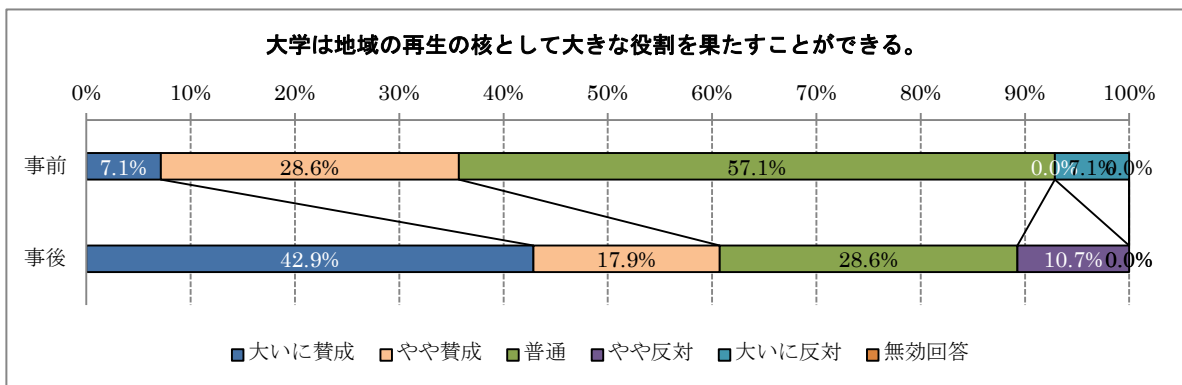


図 6-2-10 大学は地域の再生の核として大きな役割を果たすことができる

ここまで、事前と事後の変化に着目して項目別に見てきたが、全体を事後の肯定の度合い（「大いに賛成」＋「やや賛成」）によって見ることで、参加した高校生の地域に関する考え方をまとめておく。

参加した高校生は、「自分の住む地域に対し、誇りを持つことは素晴らしいことである」と考え(事後 96.4%)、「住民同士のつながりや、しっかりとした信頼関係がある地域ほど、良好な地域である」と捉

えている(事後 85.7%)。「地域間格差は仕方がない」(事後 53.5%)が、「他の地域から来られた人が定住することにより、その地域に活力が生じる」とする(事後 75.0%)。地域の活性化や良好な環境づくりには、自治会・町内会活動(事後 71.4%)が重要とする一方で、「NPO など」(事後 39.2%)や自治体の働きへの期待(事後 28.5%)は低めの数値にとどまっている。地域の外部からの支援については、意見は分かれており、地域における人間関係については、濃密であるほうが住みやすいと考える者は 35.7%にとどまっている。

全体として、高校生の地域への関心は高く、熟議を経験して、より一層それが強まった様子が伺われる。住民同士のつながりをもつことは重視されているが、必ずしも「濃密」であることは支持されていない。加古川地域の高校生は、『匿名性の高い大都市のような「地域」ではなく、適度な距離感をもった人間関係、近所づきあいにより地域での生活を送る』イメージを持っていることがわかった。

### (3)「熟議」を通してどのような能力に変化があったのか ～熟議前と熟議後～

本節では、高校生と大学生のみに実施した自己認識シート【p97 参照】(10 の能力項目からなる自己評価による能力評価シート)のデータから、熟議に参加したことによる能力の変化を見ていく。熟議前と熟議後では、どのような能力が伸びたのか、あるいはそれほど伸びなかった能力はどれか。熟議には、テーマがあり、なんらかの課題を解決するための道筋をつける、方策や結論を見出すという成果物がある。しかし、まだまだ成長過程にある高校生や大学生にとっては、熟議の形態、手法、人との出会いなど経験全体が能力の伸長を促進するという効果が期待できる。すなわち、熟議の「教育効果」である。これについては、昨年度の「熟議 2012 in 兵庫大学」でも検証されている。

本節では、大学生との比較も行いながら、高校生の熟議前後の能力変化について見ていく。

#### 1) 全体的傾向

高校生の参加者では、「貢献性」が+0.67 と最も高く、「交渉力」+0.60、「規律性」が+0.54 と続いている。高校生は、テーマへの関心を持ち、意見を発表する意欲自体が高い者が参加したと見られる【図 6-2-11】【表 6-2-1】。実際に、各グループの高校生の発表では、加古川地域の将来について純粹に、そして真剣に取り組もうとする姿が多く見られた。「貢献性」が第一位となったことはうなずける結果である。

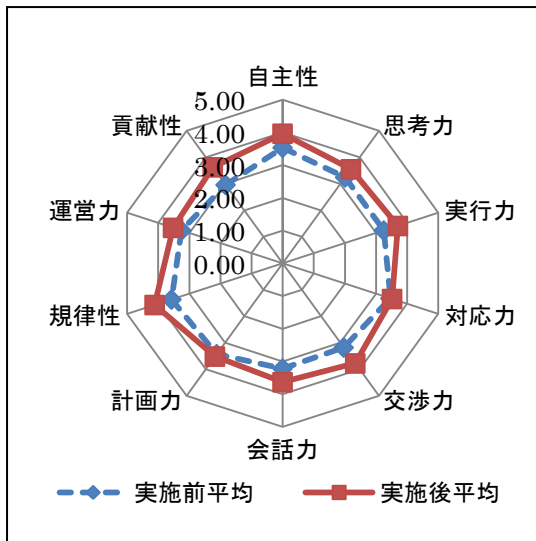


図 6-2-11 高校生の能力の変化

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.54	3.96	+0.42
思考力	3.25	3.56	+0.31
実行力	3.25	3.70	+0.45
対応力	3.46	3.52	+0.06
交渉力	3.18	3.78	+0.60
会話力	3.21	3.63	+0.42
計画力	3.43	3.52	+0.09
規律性	3.57	4.11	+0.54
運営力	3.25	3.52	+0.27
貢献性	2.96	3.63	+0.67

表 6-2-1 高校生の能力の変化

大学生のデータと比較をすると、どのような違いがあるだろうか。ここでは、大学生のうちファシリテーター（以下、F 学生）と、ワークショップに討議者として参加した学生（以下、WS 学生）との比較をしながらみていくことにする。

## 2) 伸びた能力

F 学生と WS 学生は数値に幾分の違いがあるが、伸びたと自己評価している能力は共通している。すなわち、「思考力」「交渉力」「運営力」である。このうち「思考力」は、F 学生が+0.58、WS 学生が+0.82 と伸び率が最も高い。一方、高校生では、上述のように「貢献性」が+0.67 と最も高く、「交渉力」、「規律性」が続いている。大学生と高校生では、伸びている能力として「交渉力」は共通しているが、他の 2 項目「貢献性」と「規律性」は異なっている。以下では、違いに着目して、2 つの能力項目の特徴を詳しくみていく。

まず、「貢献性」は、「社会の担い手として役割を自覚して、参画する力」であり、自己認識シートにおける能力評価の例示としては、第一段階「地域や社会に参画することの意義や役割について理解している」、第二段階「地域や社会に参画して、自分の役割を果たそうとする意志がある」、第三段階「地域や社会の担い手として、使命感をもった取り組みができる」となっている。第一段階から第三段階に向かって、評価は高く設定している。「貢献性」は、いいかえれば地域や社会への貢献であり、熟議に参加していること自体がそれを実感させてくれる経験であることから、最も高く評価されたことが予想される。

つぎに、「規律性」とは「社会のルールや人との約束を守る力」を指している。自己認識シートにおける能力評価の例示としては、第一段階「社会のルールやマナーの必要性を理解し、それらを守ることができる」、第二段階「他者に社会のルールやマナー、また約束を守るよう促すことができる」、第三段階



「異なる立場を理解しながら社会のためのルールや約束を結ぶことができる」となっている。高校生が経験したのは、熟議の議論のテーブルにおいて、手続きや時間が管理されたなかで、自分の意見を発表する、人の考えに耳を傾けるということである。ワークショップ手法そのものから影響を受けた様子がかがわれる。

これに対して、学生は「思考力」＝「問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力」が最も伸びたと自己評価した。「思考力」には、情報収集力、分析力、問題解決力などが含まれており、大学において常に意識して身につけることが求められる能力である。つぎに、高く評価したのは「交渉力」である。これは、「人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力」である。大学段階では、人間関係もボランティアやアルバイト、大学での授業におけるインターンシップやフィールドワークなど地域や社会とつながる者が多くなる。社会にでる一歩手前において、「交渉力」に焦点が当たっているのは当然とも言えよう。

### 3) 変化がなかった能力

それでは、熟議前と熟議後であまり変化のなかった能力にはどのようなものがあるのだろうか。最も変化がなかったのは、「対応力」+0.06 であり、「計画力」+0.09、「運営力」+0.27 とつづいている。

「対応力」は自己認識シートでは「状況を判断して関係や流れがうまくいくように行動する力」と定義している。また、評価段階は、第一段階が「相手やその場の状況を配慮しながら、柔軟に対応することができる」、第二段階「自分の役割と他者の役割を的確に判断し、取り組むことができる」、第三段階「物事が良い方向に流れるよう、まわりに働きかけることができる」と設定している。

高校生にとっては、年長者や大学生とともに、同じテーブルで意見を述べるということ自体緊張することであろう。全体の様子を見て、適切なタイミングで場に則した内容の発言をすることは訓練が必要なことである。「対応力」は、高校生にとっては、まだまだ難度の高いスキルを伴う能力といえるだろう。

「計画力」は、「現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力」であるが、今回、事前にテーマについて考え、ディスカッションのイメージは持っていた高校生も多いであろう。しかし、テーブルで議論を進めていく役割はファシリテーターであることが明確であり、その意味で、高校生自身の振り返りでは、能力が伸びなかったというよりは、「該当しない」ということであつたかもしれない。このことから、今後、参加者の属性（とくに年齢段階）や熟議における役割に合った評価尺度の検討もなされる必要があるであろう。

一方、大学生において、変化が少なかった能力項目は、WS 学生で見ると、高校生とは対照的に「貢献性」が+0.06 と最も伸びが低くなっている。続いて、「実行力」「計画力」「規律性」が同値で+0.25 となっている。また、F 学生では、「計画力」-0.08、「貢献性」+0.00 となっており、「自主性」「実行力」「会話力」「運営力」は同値の+0.17 であつた。議論者かファシリテーターかにかかわらず、評価の低い能力には大学生同士で共通性が見られる。このことは、熟議における役割と関連付けられた能力への着目ではなく、熟議に参加することをどう捉えているのか、参加することにどのような意義を見

出そうとするのか、という目的意識が評価結果と関連していることを示唆している。言い換えれば、高校生が熟議に参加すること自体を地域への「貢献（性）」として結びつける一方、大学生では、大学での学びに必要な「思考力」やキャリア開発に必要な「交渉力」を磨くといったインセンティブを感じての参加であったとも見ることができる。

以上をまとめると、大学生と高校生では明らかに年齢段階と熟議参加に対する目的意識のちがいによる能力評価の差異が見られる。今回は、事前事後の能力評価を高校生と大学生で同じ自己認識シートを用いて行った。今後、高校生の能力評価においては、参加の目的意識に応じて分析するためのアンケート項目の設定や、事後インタビューなども含めて、今後、評価方法の精緻化を検討していく必要があるであろう。

(吉原恵子)

### 3. コメント～学生の振り返りからみる成果と課題～

「熟議 2013 in 兵庫大学」参加者アンケート（事後）【p111 参照】において高校生・大学生がファシリテーターとして、また参加者として「熟議 2013 in 兵庫大学」に参加することそのものに意義があることは明らかにされたところである。本節では、このアンケートによる統計調査に加え、学生ファシリテーター及び大学生参加者の「コメント」や、学生の「振り返りのためのグループワーク」【p115 参照】のデータを参考にしながら、本プログラムに大学生が参加したことで有意義であった部分と、課題とされた部分について整理していきたい。

#### (1) 成果

まず、学生ファシリテーターに焦点を当てる。学生ファシリテーターを担当した学生の成果は ①ファシリテーションの理解 ②役割意識の萌芽 ③自分に対する自信、の3点に集約することができる。以下に詳細に述べていく。

##### 1) ファシリテーションの理解

ファシリテーション (Facilitation) には「促進する」という意味がある。ファシリテーターを担当した学生のコメントを読み進めていくと、「あいづち」をうつこと、沈黙を打破すること、特定の人ばかりが話し続けないよう配慮すること、既に出た意見を言い換えて分かりやすくする工夫、といった話し合いの構成要素や、話し合いを活発にするための所作についての気づきと考察が多く見受けられる。こうしたことが振り返りで述べられているということは、特にこのような所作が話し合いを構成し、また促進するということを学生たちが実践的に理解する機会になりえていたということを示す証左である。

##### 2) 役割意識の萌芽

ファシリテーターを担当した学生は、重要な役割意識をもって議論に参画することになる。とりわけ、

高校生が参加していることを強く意識していた学生ファシリテーターが多く、大学生として高校生と積極的に関わり、またサポートしていくという姿勢をコメントの中に見ることができる。実質的にはそれがうまく果たせず、ストレスを感じている学生も見受けられたが、このことが、ファシリテーターとしての自分の存在意義のひとつであり、自己肯定感を高める要因として機能していたと言える。

### 3) 自分に対する自信とグループ構成員に対する信頼

異世代の参加者が語り合うことが「熟議 2013」でも重要なポイントであった。学生ファシリテーターにとってシニア世代の参加者によるサポート、高校生の積極的な発言が「ちから」となって有意義な時間を過ごすことができたというコメントが多数寄せられていた。多世代の人々と出会い、関わる中で新たなことを知り、自信となっていくという道筋をコメントの中に見ることができた。

WS（ワークショップ）参加学生については、事前に考えてきた「強み」や「弱み」については、概ね積極的に発言できたという感想を持っている。とりわけファシリテーターと協力的な状況をつくれたグループに参加した大学生はワークショップに対しても肯定的な印象を持っているようである。

## (2) 課題

成果に対して課題は、質問紙調査でも分析が困難な部分である。しかしながら、本プロジェクトを学生の学び、成長にも寄与するものとして位置づけている以上、課題についてもしっかりと言及・省察しながらプロジェクトを進めていかねばならない。そこで、ここでは寄せられたコメント、振り返りのデータより「熟議 2013 in 兵庫大学」に参加した学生の感じた個人的・構造的課題についてまとめておきたい。

### 1) 臨機応変

今回のプロジェクトでは、ファシリテーションの進行表を前もって作成し、その進行表に沿ってトレーニングプログラムを企画、実行した。このことによって、進行の見通しが立ち、円滑な話し合いの運営ができた学生も少なくないであろう。しかし一方で、進行表通りにいかない場面に直面した際の臨機応変さに課題を抱える学生たちもすくなくなかったようである。また、進行表に忠実に進行しようとするあまり、議論の調整に集中できなかつたり、時間ばかりを気にしてしまつたりした学生もいたようである。今後の課題として、こうした進行表の作成と、臨機応変な議論の組み立て方、進行の仕方、切り返し方を学ぶ機会も必要となるだろう。

### 2) 自分も理解できていないことを進行する難しさ

話を進めるということに関する重要な気づきを経験した学生が多かったことは先述の「成果」の部分で述べたとおりである。そうした気づきに対して鋭敏に察知できるようになるのは良いことであるが、同時に議論の内容について把握していなければ進行が極めて難しくなる、ということに気づいた学生もいたようである。つまり、ファシリテーター自身のなかに議論する話題に対し、関心をもち、事前に学びを深めておく準備が不十分であったということをも2点目の課題として指摘することができる。当然議論は深まっていく。深まれば深まるほど促進者としてのファシリテーターの進行にはバリエーションが

求められる。たとえば「なにかご意見はありませんか」という問いばかりでは対応できず、「このことについては～のような議論もあるかと思いますがいかがでしょうか?」といったような働きかけも求められるだろう。そうした際の対応についても考え、準備しておくことについての反省があった。

### 3) 話題の乏しさとそれを補う情報の少なさ

学生ファシリテーターであれ、WS 参加学生であれ、議論に参加する中で話題、また話題を補う情報の多さというのは重要である。参加学生の「深めることができなかった」という感想の背景にはおそらく「話題の乏しさとそれを補う情報の少なさ」があったように考察できる。大学生として高校生を支えていくためにも、シニア世代と意見交換をしていくためにも「大学生としてのアカデミックな情報」は重要な役割を果たすものとなるであろう。今後、「熟議」を展開していくうえでも、アカデミックなレベルでの情報交換のやり取りの萌芽を目指す準備が求められるであろう。

(小林洋司)

## 第7章 おわりに

本章では3年計画となる地域活性化に関わる熟議プロジェクトの1年目について、地域の活性化に結び付けるための熟慮と議論の成果を振り返り、2年目に向けての課題の整理を行うとともに、熟議手法についての成果と定着に向けての反省を行う。

### 1. 地域活性化に向けての成果

最初に参加者の「熟慮」、「議論」の成果はどのようなものであるのかを示す。第3章の熟慮の成果をみると、参加者の理想とする地域は、年代による差は小さく、共通して、自然と利便性が共存し、豊かなコミュニケーションがあって、住みやすい地域、ということになる。成熟した社会における、安定的な地域像である。

それを踏まえ加古川地域を眺めた場合、地理構造の理由や集積の経緯から、当該地域は豊かな自然と利便性、経済的な活力とを共に備え、さらに地域内には比較的密接な人間関係が存する。それ故にこれらに関わる要素を「強み」として多くの人が認識をしている。

一方で、安定を崩すかもしれない犯罪や事故を「弱み」と挙げ、安定して、変化を嫌う地域性から将来への不安があり、またそのため他者の受入れに対する抵抗があることからの人間関係の課題もあって、それらが「弱み」と感じられるのである。つまり、当該地域には概ね満足するが、反面それへの危機感、または不安もあるといえる。

こうした熟慮をもって、議論に臨むことになったが、第4章で示すように、前述のことについて、多くの人が共通して認識をしていることを確認するのが議論の最初となっている。例えば、地域内の人間関係や交通の利便性など、参加者の立場や日常生活の違いにより意見が分かれるのは、議論の進行に変化を与え、その背景を認識する機会となったようである。こうした認識の摺合せ、あるいは見方や立場の違いからの認識の相違を確認することも、1年目の熟議では欠くことのできぬ成果と言える。

その後、主に何を議論のテーマとするかにより、後半では2つの流れがあったようである。それは、誰を対象に活動をするのか、という点である。

第一には、地域の中の人、つまり住民の満足度を高めるための方向性である。これは「強み」をより強化する方向として提示されているものである。加古川地域の良さを住民で共有し、それを知り、思いを一つにするということである。イベントの開催や若者への地域に関する教育の充実、交流の強化によって地域の協力をより進めること、などの提案がなされている。

第二には、地域外の人に対して情報を発信することである。知名度の低さも「弱み」であり、これを

改善することになる他、発信によって外部からの人口の流入を促すことが可能になれば、この地域の「弱み」となっている変化を嫌う地域性から生じる将来への不安を少しでも和らげることができると考えたのではないか。つまり、「強み」を活かし、「弱み」を和らげる議論の中で、加古川地域の内と外へのアプローチが議論されたのである。もちろん単純に二分されたということではなく、またどちらを優先すべきとの議論でもない。互いに関連をもつての議論であり、第4章でのまとめにあるように、「住んでいる人たちがより良いと思う町に変えながら、外に適切に情報を発信し、新たに住人を受け入れる」という外と内との“循環型”の関係に至る議論ともいえる。

## 2. 熟議手法の定着に係る成果

次に、熟議手法の定着について示す。

「熟議」という語の知名度が昨年度の3割から4割へと上昇していることは、第5章でも触れたとおりであり、継続することにより定着を図ることが期待される。熟議手法への理解は8割を越えており、高い理解がその背景にある。

本学の「熟議」手法の特徴でもある、熟慮と議論との段階を設けることの意味を考える上で、議論の前後での、議論に対する期待と成果の比較は参考になる。そこでは、参加者にとって議論の段階が受け身ではなく積極的な情報発信や交流にあるとの認識があったのである。とはいえ、アンケートでは熟慮の段階は意見の表出よりも聞くためと考えている人の多いことも示しており、熟慮の段階が持つ意味をより明確にしなければならないであろう。

熟議手法の定着を目指すことの一理由の一つには、民主主義における補完機能としての熟議、あるいは多様な担い手による共助の拡大の中での意見の集約というローカルガバナンスへの応用を期待するものがある。アンケートからは行政施策の方向を決める際への活用に対する期待が大きい反面、意見集約の手法としての役割にはまだ工夫の必要ありと読みとれる。これは議論の段階の条件の問題、つまり時間の長さもある他、意見集約のためのファシリテーション技術の問題もあると思われる。短い時間の議論の段階で意見集約に向けて急いだり、一定の結論に至らなかった場面も多かったのである。これらの解消方法も課題であり、ファシリテーターの育成の他、議論の段階を繰り返すなどの方法もあるのではないだろうか。

さて、兵庫大学の熟議では、学生がファシリテーションを行い、高校生も参加する。そのため若年参加者の成長を即すことも熟議の目的となる。

若年者の成長については10の指標で計測をしており、その成果を第6章に基づき明らかにする。最初の注目点としては、熟議の経験を経て、学生の場合は思考力が最も上昇しており、次いで交渉力が伸びているのに対し、高校生の場合は貢献性と交渉力、規律性が上昇している。若年者といっても高校生、大学生で特性が異なっている。特に、高校生における特徴は、若年のうちから地域のことなどに真剣に

取り組むことにより、社会への関与を促進する効果があることを示しており、シティズンシップ教育の重要性を示唆する。一方大学生の場合、ファシリテーターとなった学生と、参加者として意見を述べ議論した学生との間で、自己評価にも違いがみられる。ファシリテーターの役割と意味を学生がより理解するための訓練にも工夫が必要である。さらに、学生では経験を積むほど、自己評価が高まることが明らかとなっており、参加を続けることによる自己肯定感の高まりを示すものといえる。

このように若年者に対する教育への効果は大きいものであり、継続により、さらにその価値が高まること、高校生の参加が今後の地域や社会の変革に不可欠であることを示す。

### 3. 「熟議 2014 in 兵庫大学」に向けて

3年継続の2年目は、テーマを絞り、その解決策を見出すことが求められる。テーマについては、加古川地域の「強み」を強化するために、①若年層を中心とした地域住民に対する教育や啓発活動、②世代を超えての交流とコミュニケーションの活性化、といった点がテーマとなるであろう。教育の問題、コミュニケーションの問題は地域への参加、コミットのあり方でもある。

次に「弱み」を改善するためには、①加古川地域の PR、②外からの人材の定着、などが課題になると思われる。外への発信ということに留まらず、地域の変革に必要な人材の活かし方やその仕組みなどを模索する必要がある。人口の減少が食い止められない以上、その価値を最大に発揮することが地域間競争の主要なテーマになる。

ところで、議論の俎上にはほとんど上らなかったものの、熟慮の段階で指摘され、課題と思われる犯罪の発生率の高さや交通事故が多いことなど安心・安全に係るテーマは熟議により合意形成を行う適切なテーマとも思われ、次年度で取り上げることの重要性を指摘しておく。

テーマとともに、熟議手法の定着に向けては、ファシリテーターとなる人材の育成に定期的に努めることや、熟慮の段階が議論にどのように位置づけられるのかを明確に示すことなどプロセスの見直しや啓発にも力を入れたい。なにより、継続が重要であることから、今年度の参加者が、「熟議 2014 in 兵庫大学」にも参加頂ける環境作りも必要になるであろう。

当該報告書がその一助となり、これを読んだ参加者が、再度兵庫大学での熟議に参加されることを強く願うとともに、地域の活性化に関心ある方々がこれに関わる機会を今後も作っていくことを約束し、まとめとしたい。

(田端和彦)

